

平成24年6月1日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成24年2月15日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

民主党参議院議員 福山 哲郎（事故当時は内閣官房副長官）

2 聴取日時

平成24年2月15日午後1時30分から同日午後5時30分まで

3 聴取場所

事故調事務局927会議室

4 聴取者

柳田委員、高嶋参事官、飯崎参事官補佐、神藤主査、仁保主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

- 下線部については、先方より強い非開示の要望があった。
- 本文において(1)～(6)として言及される避難指示は以下のとおり。
 - (1) 1Fから半径3km圏内の避難指示(3/11 21:23)
 - (2) 1Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 5:44)
 - (3) 2Fから半径3km圏内の避難の指示(3/12 7:45)
 - (4) 2Fから半径10km圏内の避難の指示(3/12 17:39)
 - (5) 1Fから半径20km圏内の避難の指示(3/12 18:25)
 - (6) 1Fから半径20～30km圏内の屋内退避の指示(3/15 11:00)

以上

○質問者 それでは、ヒアリングの方をよろしくお願いたします。

事前に質問事項ということでお渡ししていたのですけれども、この中で特に最初に避難の関係、特に福山先生は避難の関係で携わられていたと今までお聞きしておりますので、避難の関係について中心にお聞きしたいと思うのですが、まず最初に、3月11日の震災後から最初の3kmの避難指示が出た辺りまでの福山副長官の当時の時系列的な動きについて、これは1.の(1)の緊急事態宣言の発出等に関わってはくるのですけれども、最初の状況について教えていただきたいと思います。

○福山前副長官 これはどのぐらい答えればいいのでしょうか。ものによりますよね。最初に、済みませんがお話をさせていただきます。

2時46分に震災がありました。もうあちこちで報道されていますが、私は副長官の執務室におりました。揺れ出したときに、御案内のように決算委員会で、総理始め官房長官全員、国会の委員会室にいて、私は副長官室のテレビのモニターで揺れを見て、これはまずいと思ひまして、すぐ隣の副長官の秘書官室に飛び込みました。隣なので、おいおい、大丈夫かという話をして、テレビをとにかく注意してくれと。その後、総理と官房長官は国会がとにかく休憩になるかどうかというのは委員長の判断なのでわかりませんので、私は自分の秘書官に、危機管理監を始め緊急参集チームを下に集めてくれと、その指示を出してくれという指示を出しました。

その後も「僕は下に降りるぞ」と言って秘書官数名を連れて危機管理センターに向かいました。

結果として2時56分か58分の間ぐらいだと思いますが、危機管理センターに飛び込みました。同時に枝野官房長官も国会から飛び込んでおられて、ほぼ私と官房長官は同時でした。

当時、もう参集チームは集まっております、本当に大変ごった返している状況で、きちっとした会議をしているという状況ではありませんでした。伊藤危機管理監も当時はもう席に着いておられて、私と官房長官が着いた恐らく4～5分後だったと思いますが、菅総理が入って来られました。当然、松本防災大臣も我々の正面方に座って

座りながらそれぞれの判断をしたというのがスタートです。

現実の問題として、大臣がみんなこちらに寄ってくるという話を枝野官房長官と相談して、情報が全くない中で大臣に来てもらっても余り意味がないというので、一度各省庁に戻っていただきました。各省庁に戻っていただいて、できる限りの省庁の集めた情報を持って危機管理センターに集まってくるという指示を出して、結果としてもう皆さん御案内の

ように、災害対策本部が設置されたのが15時14分、そして災害対策本部、各閣僚が来たのが15時37分です。これは1回、各省庁に入ってもらったのでこの時間になりました。結果として申し上げますと、もう皆さん御案内のとおりですが、その場では電話が鳴り響いていまして、各省庁がそれぞれ例えば国交省ですと道路の陥没状況、道路の通行止めの状況等のどんどん緊急電話が入ってきます。鉄道の止まっている状況、脱線状況等について入ってきます。消防庁からは救急車、更には消防車の手配が何々地域119番何件、110番何件という形でどんどん警察からも入ってきます。

しかしながら、御案内のように、8県500kmにわたる被災ですので、どんどん入ってきてその火災の状況はどんな状況なんだ、その119番はどの程度の広がりなんだと言っても、全くその時点ではわかりません。

一方で、厚生労働省は例のGMATだったか、医療班の手配等をしています。一方で、御案内のように、保安院並びに資源エネ庁のところからは、福島第一原発については緊急停止をしたというのがすぐ緊急電話で入って、そこについては一旦我々は実は頭から消えました。緊急停止だと、そこでほっとしたという状況で、あとはそのプロセスの中で何を一番最初に指示するかというのはその場その場の判断で、いわゆる伊藤危機管理監と、原田統括官と一緒に、総理、官房長官とずっと座りながら現実の判断をしていたというのが実態でございます。

その中で御案内のように、3時40分ぐらいに福島第一原発全電源喪失、冷却機能停止というのが保安院のマイクを通じて流れてきました。それは多分15時40分よりちょっと後だと思えますが、流れてきたときに、済みません、私は正直にカミングアウトすると、原子力は当時は全く素人ですので、えっと思ったのですが、それが一体次に何を■するのかについては、ダイレクトには正直申し上げてイメージができませんでした。

しかしながら、そのときの喧噪の最中の危機管理センターがちょっと雰囲気が変わったのだけは覚えています。これはひょっとしたら大変なことが起こるのではないかなと思いつつながら実はオペレーションを続けていたというのが実態のところなんです。

結果として言うと、御案内のように1回目の災害対策本部が終わって、その後、一度執務室に入ります。これは基本的には総理の記者会見の準備をしようということで執務室に入りました。そして、そのときには岡田幹事長や当時の仙谷代表代行が来られて、どういうメッセージを出すか。このときは野党に対する呼びかけ等も重要でしたので、そういったことの打ち合わせをしました。

その後ですが、御案内のように海江田大臣が入ってきて、例の4時45分からの15条事象についての報告が執務室であります。これは私は同席をしています。このときにいろんな報告を受けたのですが、受けている最中に御案内のように党首会談が入ったので、総理は抜けます。総理は抜けられたのですが、私の記憶で言うとこのときには先送りをしたということではなくて、現実の問題としての詳細が今一つ把握できないので、とにかく党首会談を終らせてすぐ戻ってくるからと言って総理は行って戻ってこられたというのが私な

りの記憶です。

その後、6時過ぎから中野寛成国家委員長とか伊藤危機管理監が入って、原子力災害対策本部が始まる前にもう一度海江田大臣と打ち合わせをします。そのときに例の上申書の話がその前も含めて出てきます。

御案内のように、原子力災害対策本部と緊急災害対策本部が一遍に二階建てで行われるのは6時9分ぐらいだったのですけれども、このときに実は総理はこういうことを発言しています。福島1号、2号、3号、本来なら炉を止めて冷却用の緊急用ディーゼル発電機を回すのだけれども、系統が津波で動かないと。今は電池で動く冷却系で今は冷やしている。8時間を超えて炉心の温度が上がると10時間でメルトダウンを起こすという極めて心配な状況ということを原子力災害対策本部で総理が発言されています。私はこれをメモしているのですが、これはいわゆる海江田さんとかが15条通報で入ってきたときの説明を総理なりに自分なりに咀嚼したことをこの場で言ったと思っています。その咀嚼の時間が総理はそれなりに必要だという判断の中で、実は党首会談のときには一度中断をしたというのが私なりの記憶です。

そのときに総理はもう一個言っているのは、陸路、空路で電源車を送っていると。避難を行う必要があるかもしれない。経産大臣から総理に上申を受けたみたいなのを言われています。これが表になっていない原子力災害対策本部での総理の御発言です。ですから、実はこの時点で一定の危機的な状況については総理も我々も判断をしておりました。ただ、この最悪の事態はどの程度の蓋然性でなるのかとか、本当にこれが起こり得るのかということについては実は わかっていません。そういうことが起こるかもしれないという説明はあったので原子力災害対策本部をやるわけですけれども、結果としてはそういう話になります。

その後、実は緊急災害対策本部を終えてからもう一度執務室に戻ります。このときに、いわゆる東電からの武黒さんや保安院の寺坂院長等が来ていて状況について説明することと、何とか電源車を手配という話があります。このときには当時副長官でいらっしゃいました藤井副長官がいらっしゃったのを私は非常によく覚えていて、なぜならば武黒さんというのは政治的な渉外をやっていた担当なので、藤井先生とは面識があったのです。「よっ」とか言って藤井先生が言われているのを私は見えて、私は全く面識がなかったので、なるほどそうなのかと思って武黒さんの話を聞いて、実は電源車の話を聞きました。

電源車の話を基本的に聞いたというか、何がどのぐらい必要なのかというのを結果として私が引き取りますと言って、私が総理の秘書官とこの電源車の手配を具体的に始めたのがこの夕方以降です。当時の東電からのメッセージは、とにかく電源車をくださいというメッセージでした。なぜ電源車かといえば、もう諸先輩方おわかりのとおりで、とにかく冷却機能を復活させるのは電源が必要だから電源車をくれというのが東電の唯一のメッセージです。

一方で、阪神・淡路大震災の学習を経て、実は我々は例の緊急車両以外は通行止めにし

ておりました。つまり、東電から電源車を送るにしても、警察の誘導が必要だという判断の中で実は官邸が関与したというのが実態のところでは。実際、執務室では電源車の手配をやっている最中に、我々のところでは気仙沼がもう火事で火の手が上がっているとか、地域が孤立しているとか、消防が動かないとか、海が燃えているとか、市内で火災が発生しているというのは並行してどんどん情報が上がってくるような状況でした。これが大体8時過ぎぐらいです。その8時過ぎぐらいのときに、実は24時間後に放射能漏れと、1時間前には半径1～2kmに対しては避難をさせなければいけないのではないかという問題提起が保安院からありました。これは私のノートですけれども、明確にそれが書いてあります。

そのときにメモがしてあるので、どのぐらいの人数避難させるんだと聞いたと思います。3kmが5,870人、1967世帯。大体そこからPM3時半とここに書いたのですけれども、
8時間後で11時半ぐらいに大体状況によって危なくなるかもしれないというようなことが書かれていて、避難をさせなければいけないかもしれないというのが8時26分の段階です。その後、8時半に総理は危機管理センターに飛び込みます。ここで総理は原発ではなくて全体の被災状況、津波・地震等のオペレーションをしている危機管理センターの要の
スタッフを前に、とにかく連絡を密に確実にしながらやってくれと、コミュニケーションしてくださいと、頑張ってくださいと、この3つだけ総理は言って、実は問題になっています危機管理センターの中2階の小部屋に飛び込みます。

これは批判ではなくて申し上げると、5階の執務室と危機管理センターしか中間報告は登場しないのですが、実は非常に重要な要素になっているのは中2階の小部屋です。ここから先、ベントの意思決定をする1時半まではほぼ中2階が舞台になります。それはなぜならば、原子力発電所という特殊な事故の中で、地震や津波と一緒に、先ほど申し上げた
電話が鳴り響いている大きい危機管理センターでは全くシビアな意思決定をするような場ではないので、中2階の小部屋に行きました。

そこに総理、経産大臣、班目委員長、東電の武黒さん、武黒さんを補佐する人、寺坂院長、官房長官、私がほぼ座って、そこに当時補佐官であった細野大臣と寺田補佐官が連絡で入れ代わり立ち代わり入ったというのが実態です。

なおかつ連絡要員が要るということで、寺田補佐官と細野大臣はほとんど入ったり出たりというような状況でした。

私は実は電源車の手配を必死にやるとともにもう一個オペレーションがあつて、それは首都圏の帰宅困難者に対する避難場所の確保というのが私のもう一個のオペレーションでした。これは御案内のように東京も全部の電車が止まっていたので、首都圏の勤務者、学生が帰れないという状況で、全省庁と経済界に避難をする場所を確保してくれとお願いして、そのリストを上げてもらうために私は会見をして、それをテレビのニュースのテロッ

プで流してもらおうというオペレーションをしておりました。ですから、私の夕方以降の2つの大きな仕事は、電源車の手配と帰宅困難者です。

なぜ私がこれをコミットしたかという、枝野大臣は全体の被災地状況を把握していただいて、官房長官としての会見をしていただかなければいけないので個別の案件は私が抱えますと言ってこの2つを私が引き受けました。寺田補佐官は基本的には総理の身の回りの世話が必要なので、寺田さんは総理の部屋に行っています。身の回りの世話をさせていただきました。総理は基本的には中2階で原発対応にコミットしていただきました。

先ほど申し上げた8時半の総理の危機管理センターでの激励は、基本的にはそういう役割分担をする中での意思決定だと思っただけだと思います。実は9時1分には銀座線が復旧するとか私のノートに同時に書いてありまして、なおかつ JICA、六本木何とかセンター、防衛省の市ヶ谷の研究所、これは避難者を受けている名前が挙がってくるとどんどんメモしていたというのが実態です。

○質問者 ちょっと済みません。8時半の総理の3拍子ですけれども、もう一度確認させていただきますか。

○福山前副長官 連絡を確実にしてくれと、コミュニケーションしてくださいと、頑張ってくださいでした。

○質問者 この連絡というのは原発に限ってですか。

○福山前副長官 いいえ、全体です。これはもう危機管理センターで言われましたので、ここはすべての震災対応をしている[]の前でやられたので、原発だけにこだわりません。

○質問者 現場に[]もういたのですね。

○福山前副長官 はい。

○質問者 どうも。

○福山前副長官 それで問題のベント、それ以外の話になりますが、実態として言うと、私は日が変わる直前まで電源車の手配をしていました。結果として電源車は恐らく30台以上現場に向かっていると思いますが、その理由は道路がどこで寸断されているかわからないのと、現実に電源車は何時にたどり着くかわからないのと、1台でも多く電源車が行った方が電源が後々長く持つのではないかという思いの中で、いろんなところから電源車の手配をしました。そのメモも残っているのですけれども、東京から20台とか、那須塩原から3時間で3台行くとか、国立府中から5台とか、茨城、水戸、大宮から防衛省から飛ばすんだとか、そんなことをずっとやっていました。

ただし、空路の方が早いかもしれないということで、同時に防衛省にヘリで運べないかということの依頼をしたら、残念ながら日本の防衛省、自衛隊には電源車の重さを運べるヘリがなかったので、私は夜中は日が明ける直前は、駐留米軍に協力依頼をしてヘリを手配できないかということを経理の秘書官を通じてお願いしていました。ですから、実は若干話しておりますけれども、次の日の明け方の7時ぐらいのニュースで米軍の協力の要請

を断って冷却材を断ったという報道が流れました。あれについては私は信じられない思いで、もう私はその前の日が変わる前から駐留米軍に協力を要請していて、駐留米軍は非常に献身的にやっていただきました。ですから、全くもって日本が協力要請を断ったみたいなことはないのになぜこんな報道が流れるのだろうかというのが私の率直な実は明け方の思いでした。

現実問題でそのオペレーションをしている最中に、残念なことに■時半に初めて死者の88人という報告が上がってきました。実は日が暮れてから現地は通信と電気が途絶えていますから真っ暗なのです。先ほど申し上げた自衛隊のヘリからの映像も真っ暗です。津波の状況も全くわかりません。そんな中で88人の死者というのが22時30分に入ってきて、悲痛な空気が全体としては流れました。しかし、結果として1万5,000人ですから、まだこれはほんの最初のスタートラインだったというのが実態です。

○質問者 ちょっと済みません。電源車は30も集めるといのは、事前に電源車を持っているところのリストというのはいったいどうですか。

○福山前副長官 これは東電がそれぞれの自分のプラントに電源車が何台かあったのと、それぞれの防衛省に電源車があって、全部リストがあったというか、東電は持っていたと思いますが、とにかくあるところに関わり合わせて行かせたというのが実態です。

○質問者 東電と防衛省。

○福山前副長官 はい。当然そこに警察なり防衛省なりが先導で付きました。とにかく急いで行くようにということで、緊急車両として対応するようにということでやりました。

結果として、12時でございますが、総理が下の中2階の小部屋から執務室に戻られました。執務室に戻って何をやったかという、0時15分から初めてのオバマ・菅会談があります。そこではオバマ大統領から非常に真摯な言葉があって、私の記憶では総理は心にしみるみたいなことを言われて、オバマ大統領は本当に厳しい恐ろしい大変な時間を過ごしていると思いますという言葉がありました。そのときにもう実は電源車の手配をお願いしていたのでいろんな協力をお願いしているよと言ったら、オバマ大統領も聞いているというようなことのやりとりがあったので、もう当時のアメリカは現状を把握していましたし、特にミリミリの中では、防衛省、国防省の間では連絡を取り合っているというのはオバマ大統領もわかっていたという状況です。菅さんから輸送能力で実際お願いしているというお礼を言われています。

この12時15分からオバマ大統領の首脳会談が終わった後、0時57分ですが、総理は危機管理センターの小部屋にもう一度飛び込みます。ここでいわゆるベントの議論になります。あえて先ほど飛ばしたのですが、中2階にいた8～11時ぐらいまでの間に、ずっと実は今後の想定等について、保安院とか班目委員長とかからヒアリングをしています。最悪の状況はどうなるのか、避難はどうすればいいのか、チェルノブイリのときにはどうなるのか、爆発は起こるのか、起こらないのか、こんなことを散々特に総理は理系だったものなので、かなり炉のこととかも含めて問い詰めた中で、済みません、余り明瞭な答えが

返ってこなくて相当我々はいらつきました。

その状況を踏まえて0時57分に危機管理センターに入って、それが私のこのメモですが、1時半のベントの意思決定のところですけども、いわゆる放射能プラスヨウ素が出る。3号機は水位が高めに維持と書いてあります。バックアップとちゃんと書いてあります。1号機はベントに入ると。炉心は溶けてないと書いてあります。外に出ないと。水位がプラス1mと書いてあります。ここで実は東電側から武黒さんから2時間ぐらいをめでベントができるという報告があって、我々はベントというのは世界で例があるのかというのを聞いたら、まだありませんというようなことを寺坂さんが、このときは寺坂さんはいなくなっていたかな。だれでしたか、次長。

○質問者 平岡次長。

○福山前副長官 平岡さんになっていたかもしれませんが。寺坂さんは要は10時ぐらいの間のやりとりの中で消えたかもしれませんが、平岡さん辺りや班目さんからはベントというのは国際的には例がないという話を聞きました。しかしながら、済みません、政治家の我々から言うと、まず第一に爆発のリスクはないのかということを知りました、チェルノブイリ型の爆発はないのかと、スリーマイルとはどう違うんだみたいなことをよく聞いていましたので、そのことばかり言っていました。

話が前後して恐縮なのですが、その前に3km圏の避難の指示を出します。それは先ほど申し上げた10時ぐらいのやりとりのときに、その避難の状況の意思決定をするのですが、そのときにはもう簡単に申し上げると、先ほど私がノートに書いてあった何千人という数値が前提にあります。大きくしないでいいのかどうかという議論はしたのですが、そのときに気づいたのは、3kmから先にしないと先に広めのところから逃げ出すと渋滞になって危ないと。とにかく炉の近くを逃がそうという判断をしました。一遍に大きくした状況の中では、遠い人たちが逃げるとそこで渋滞すると。だから、本当に距離の近い人たちが渋滞で遅れる可能性があるということで3kmということを決めました。

しかし、一方で、彼らは3kmぐらいしかマニュアルがないみたいなことも寺坂さんはそのときには言っていました。準備はしていませんみたいな。もう一個は、班目さんからはそんな大きくやる必要はありませんみたいなことが何度も正直言ってありました。その中でとにかく3kmだと。当時、皆さんはもうおわかりのように、福島県が先んじて2kmを出しているはずで。そのことについては我々は全く知りません。

オフサイトセンターがどういう状況になっているか全くわかりません。ただ、明確なのは、停電だと、機能はなかなかしていないということだけはわかっていますが、オフサイトセンターにどういう機能でどういう役割を果たすのかについても余り明確な説明は寺坂さんからはありませんでした。そうすると、我々から見れば、当然東北は全部緊急電話しがつながらないし、停電している、通信途絶えているのは嫌って言うほどわかっていますから、どこかの意思決定はここでしなければいけないという空気がその中2階では流れていたというのが実態のところでは。

結果として、それが日が明ける前ですが、1時半の先ほど言ったベントの意思決定のときには、当然しょうがないねという話になりました。そのときにはもう3kmは避難が出ているのだよねという確認をして2時間めどでベントができますという話になっているので、我々としては実はこれでベントの意思決定をしたから放射性物質が出てきてしょうがないなと言って総理は執務室に戻られました。私はそのまま危機管理センターに残りました。2時間ぐらいがめどだからということだったので、3時ぐらいに会見をしようということをして海江田大臣と枝野官房長官と話をし打ち合わせをしていたというのが実態のそれ以降です。

現実問題として、そのころ私は知らないのですが、総理は視察の準備を上で指示をされます。ですから、ちょうどベントの意思決定をした後かその前後から総理は5階の執務室で視察の準備をされます。私のノートに書いてあるのですが、2時20分、総理訪福島決定と書いてあります。ですから、大体この手前に総理の秘書官室の方でその話をしていたということが私なりに推測をします。

現実に官房長官のベントのとき、経産大臣のベントのときには3時になったのでやろうと言ったときに、明確に私は官房長官と話し合いをしたことを覚えています。経産大臣と東電が経産省で会見するよと、それで終わりにしようかと言っていたのですが、官房長官にベントという初めてやること、放射性物質を外へ出すのに、日は明けているのですけれども、朝になってから官房長官が会見をしたらそれは隠蔽したと言われると。だから、とにかく海江田大臣の会見が始まった後を受けて官房長官がやはり会見してくださいという話をし、枝野さんもそうだねと、それはやろうと言っていたので、はっきり覚えているのですが、経産大臣の秘書官と官房長官の秘書官が電話でやりとりをして、経産大臣の会見が始まったということを確認して官房長官は会見室に伺われました。会見を3時12分から始められました。

このときに明確に私たちの中では3時過ぎにベントが始まると思っています。当然、経産省での会見でも、東電側が記者からの質問にもうすぐ準備ができて始まると思いますと答えています。ですから、政治の我々としてはもうベントは行われて、ある種のここで一旦危機が回避できるのではないかという空気にはなりました。当然、そのときに検証委員会の報告を見てたまげたのですが、ICの議論みたいな話は私たちのところにはあまり入ってきていません。ましてやそんな細かい技術的な話があつた寺坂さんと武黒さんから出てくるとは思えないので、実態としてはそういう状況でした。

官房長官の会見には私は最初の1週間ぐらいは全部同席をしていますので、3時12分から官房長官の会見に同席をした後、官房長官にはお休みくださいと言って一旦執務室に戻っていただきました。私は危機管理センターに残っていたのですが、ぞっとしたのは、御案内のように3時49分、長野県で6強の地震がもう一度起こりました。連続してまた2回長野と新潟で大きいのが3時49分と4時何分かにあるのですが、私は2時46分の危機管理センターに飛び込んだ状況と同じ状況がもう一度危機管理センターの中で始まりま

した。

これはすごく情緒的なので余り報告書にはそぐわないのですけれども、私はそのとき初めてとなりました。気象庁の担当者に向かって、この新潟の大地震は、当時は東日本大震災などという名前は付いていませんから、東北の地震の余震なのか、関係する地震なのか、誘発地震なのか、全く関係ない別個なのか、どちらなんだと気象庁に初めてとなりました。気象庁からの答えはわかりませんという答えでした。

本当にこれは情緒的なので余り意味はないのですけれども、当時は福島原発がベントするかしないかの最中で電源が切れていると。東北地方はみんなで津波でやられてその被災状況もわからなくて通信が途絶えて停電している。今、一生懸命次の日の明朝に自衛隊が出動できる体制を整えている中で、新潟とか長野とか、ひょっとして東海とかこのレベルの大きな地震が起こったら、完全に政府の対応能力は不足すると思いました。これは本当にぞっとしました。朝日新聞の取材で、私は背中に氷の柱が一本立ったような気がしたと答えたのですけれども、今、私は政府の対応能力が不足するとちょっと格好いい言葉を使いましたが、そのときに何を思ったかというとはっきり覚えているのですけれども、完全に手と武器が足りないと思いました。どこか見捨てなければいけない状況が起こるのではないかという気がしました。本当に私は途方に暮れたのはこれが最初です。

そこから小一時間、2時46分と同じ状況に入りました。実は参集チームの危機管理センターのメンバーも、それでなくても東北で緊張感でいっぱいの中でもう一度同じ地震が起こったということで、本当に気持ちを奮い立たせてそのオペレーションをしてくれました。ほぼ1時間後ぐらいに、人的被害の把握なしに連絡を取れる状態だと、119番1件もなしと書いてあるのですけれども、正直言ってほぼ1時間経って、そんな被害は大きくないんだというのが全体の中のコンセンサスになった時点で、よかったと思って、私はベントが終わっただろうなと思って中2階の部屋にベントは終わりましたかと言って飛び込みました。そうしたら、ベントが終わっていないというのを東電の武黒さんから聞いて、2度目のどなりを私はしました。なんでベントが終わっていないのですか、3時にやると言ったのはあなたたちですよ。あなたたちが3時にやると言ったのですよ。それで官房長官が会見をしているのに、国民にうそをついたことになるではないですかと、爆発しないのですかと、もう1時半に決めてから4時間も経っていますよと言ったのが、2度目のどなった記憶です。

私はすぐその後、官房長官のところに行きベントが終わっていませんと。このときは細野さんが一緒だったと思います。官房長官もちよっとたまらぬと、だって、会見した本人ですから、たまらぬという雰囲気の中にいました。それでもう一回危機管理センターに下りてきて、5時半くらい、総理が危機管理センターに執務室からもう一回下りてこられました。そのときに私は寺田補佐官が総理の横に付いて下りてこられたのですけれども、寺田さんはその間ずっと執務室にいて視察の準備をされています。秘書官と2人で下りてきて、私は総理を迎えて、結果として総理に一言ベントがまだ終わっていませんと

言ったら、総理がえっという顔をされて中2階に飛び込まれました。総理がもう一回私たちと同じようになんで終わっていないんだと言ったら、そのときの答えは、ベントには電動と手動がある。電動は停電のお陰でできませんと、手動は今時間がかかっています。作業工程で準備をしている時間がかかっていると、そしてなおかつ手動で行くには線量が今上がっていて行きにくい状況ですという状態の報告があつて、そんなこと言つたつて爆発するのではないのか、危なくないのかと言つて、とにかく早くベントしろベントしろと言つている中でほぼ6時前になって、そのときにもうベントしないと爆発する危険性があるのではないですかという確認をしたら、例によって班目さんですから、それはないとはいえませんか、ゼロではありませんとかというたぐいの答えになります。

そのときに3kmでは足りないという感じを総理も私も官房長官もみんな持って、これは指示を出さないと危ないですねということで5時44分、10km圏内の避難指示になります。

○質問者 その話は中2階ですか。

○福山前副長官 中2階です。

その10km圏内で避難をするということを決めて、そのときに実は風向きの議論をしています。風はどちらだと。そうしたら、海側ですみたいな報告があつて、とにかく10km圏内は逃げてもらおうと。そのときにどういう手段で伝えるんだということも確認しました。私たちは一応停電していて通信が途絶えているのは嫌というほどわかっていますから、そうしたら、もうしようがないから警察車両や防災車で、私のときのイメージですが、要はスピーカーか何かで走ってもらうしかないのだみたいな話を聞いて、とにかく何でもいいから避難をしてもらおうということで5時44分に避難の指示をお願いしました。

報告書には実は載っていないのですが、総理はそのことを国民に出発前のヘリに乗る前のぶら下がりですら総理に明確に外へ言ってもらおうと、それが流れた方が避難が早くなるという判断と、決めたことはちゃんとすぐと言おうという判断の中で総理はヘリ出発前ぶら下がりの会見で10km圏内の住民の皆さんにも避難をしていただきますと発表してヘリに乗っておられました。これが実は私なりの総理が視察に行くまでの状況です。

余計なことを言うと、海江田大臣は自分も行くということをや2時か3時ぐらいに言い出されました。さすがに所管の大臣と総理が行くのは危ないと思ったので、済みません、これも別に自分がということをお願いしたいわけではありませんが、官房長官の部屋に私は飛び込んで、私からまさか経産大臣にやめてくれとは言えないので、官房長官から電話してもらえませんかと言つて枝野さんに連絡をして、枝野さんに話したら枝野さんがわかつたと言つて、枝野さんから経産大臣に電話してもらつて、経産大臣は所管の担当なので残つてくれという話をし、結果として残つてもらいました。

寺田補佐官と私のどちらに[]行くかということを一応議論したのですが、官房長官の補佐を私はしなければいけないので、寺田補佐官に行つていただくという状況[]中2階に実は総理が行かれた後、ほとんど私は海江田大臣と一緒にいて、海

江田大臣は必死になって早くベントをやれと言っておられました。そうしたら、お前らがベントしないのだったら命令にするぞということを何度も海江田大臣は言われて、結局業を煮やしたように、6時50分ぐらいだったと思いますが、海江田大臣命令の措置命令にベントが変わるはずです。

正直申し上げて、このときにベントを我々が躊躇しているとは余り思っていません。要はわかりませんから。実は報告書全部、私も通読させていただいて若干感じるのは、後々何となく報道等で言われているものと現実のそのときの状況が、役人側だけのヒアリングと東電側だけのヒアリングなので仕方ないと思っているのですけれども、そこが若干混在しているなという感じがします。私たちの中でそこで躊躇しているというか、なぜやらないのかがよくわからない。だって、1時半にやると言ってきたのは向こうですから、3時にやると言ってきたのも向こうですから。

余計なことを付言しておきますと、当時は冒頭申し上げたように私は素人ですので、原子力安全委員会の委員長というのは、東大の教授だということも当時承っていましたし、委員会の委員長というものがどれほどの専門家でこの人に頼るしかないというのが実態です。だれもほかに頼る人がいません。

これははっきり私は覚えているのですけれども、総理が業を煮やして、もう吉田所長と直接しゃべらせてくれと途中で言ったのです。これはどこの時点かわかりません。ベントをやる、やらないの時点だったのか、ベントをできないと言われて避難の指示を議論していたときなのかははっきり覚えていないのですけれども、「吉田、現地と直接連絡させる」と総理が言ったときに、実はそこで武黒さんが自分の横にいた補佐の人に、「現地の吉田所長の連絡先の番号を調べろ」と指示をこそと小声で言っているのを見て、何だこの人は現地と直接連絡を取っていたのではないのかと私は愕然としたのを覚えています。

つまり、武黒さんは全部本部経由だったということです。本部経由は、これは検証委員会の皆さんもよく御案内のように、本部全部テレビ会議をやっていました。当時、私たちは何にもそのことを知りません。本部を通じて武黒さんが全部ワンクッション入れて、極端な話を言うと、本部から官邸の指示がどういう形で吉田さんに伝わっているのかというのは後になって危ないと思いました。つまり、我々の意向は全然どこで伝わっていたか、どこでどういうふうにされていたかもわからない状況です。途中でこの武黒さんは吉田さんに直接しゃべっていないんだということを私は夜中に感じて、ちょっと危ないと思いました。一方で、途中で寺坂さんから、だれでしたか。

○質問者 平岡次長。

○福山前副長官 平岡さんにチェンジして、

挙句の果てにはベントがされないと状況の中で、徐々に大丈夫かなという気分になったのがほぼ明け方の状況です。でも、最初のうちはその人たちしか頼る人たちはいないのです。これが実態です。それが正直な私の思いです。

これは悪口を言っているとか、その人を中傷誹謗しているのではなくて、その限られた情報の中で我々とはとにかく総理と官房長官と寺田さんと私は内々に話したのですけれども、もうとにかく1分でも1秒でも早く避難指示は出しましょうと。後で大きすぎたと言われてもいいから、避難の範囲を拡大しましょう、大きめにやりましょう。後で小さすぎたというのは絶対だめですと、とにかく被曝を最小限に抑えることが最大のやらなければいけないことだと思いますみたいなことをよくしゃべっていたことは記憶しています。それについては総理や枝野さんも完全に同意をしてくれました。

もう一個、これも内々、情緒的な話ですが、このまま線量が高くて作業を続けてもらうということは、爆発が起こったら作業所の人たちの命が危ないんだなというのは、ど素人の我々からすると政治家ですから、人命が危ないのかもしれないということについてはみんな腹の中では思っていましたけれども、口には出さない中でのコンセンサスはそれぞれありました。なぜかという、私は弱い人間なので、自分一人でそれを思っているのが耐え切れなくて、途中で寺田さんに5時半ぐらいだったと思いますが、このまま作業を続けて爆発するという、サイトの人たちは危ないということですねと確認したら、寺田さんが、わからないですけども、そうだと思いますよと私に言ったので、自分の感じとそんなにずれていないんだなと思いつつ、でもやらなければいけないと感じたのは、それはなぜ覚えているかという、わざわざ小部屋から出て階段の踊り場まで言って、私は寺田さんとその会話をしたのを覚えているのですけれども、そういう状況が6時過ぎまでの状況です。

報告書に書いてあった明け方の時点で IC の状況について吉田さんが気がついて、もうひょっとすると炉心溶融が起こっているかもしれないという表記が中間報告に書いてありました。ここは私は [] チェックしたのですが、ならば、なぜそのことを吉田さんは総理の視察の場で言わなかったのかと。総理の視察の報告を私は受けました。総理も確認してきましたが、現実の問題として総理が行った視察の場面で吉田さんからはベントは早くやりますという問題があったし、決死隊をつくってもやります吉田さんの話を聞いて、総理は吉田さんに対する信頼感を高めて帰ってきました。総理が帰られての第一声は、私に対して「吉田は大丈夫だ、信頼できる。あいつとは連絡を取り合える、大丈夫だ、やれる」と言ったのが総理の第一声だったので、決死隊をつくってやるという吉田さんの表現はわかるにしても、総理が着いたのは7時半前ですか。なぜ本当に中間報告にあるように1時くらいの時点で IC の問題がわかっていて、炉心損傷していると思っていたならば総理に伝えなかったのかというのは私なりによくわかりません。

もう一点は、中間検証によると、IC がだめで2号機よりも1号機が危ないという判断をしたというのはどうも2時から3時の間ぐらいになっています。例の武藤さんの会見のときにどちらだと言われたときに、武藤さんがはっきりむにゃむにゃ言っていたという状況にもなっています。それは私はわからなくもないのですけれども、私のこのノートは1号はベントに入ると明確に書いているのです。

○質問者 何時ぐらいですか。

○福山前副長官 だから、0時57分に総理が危機管理センター入りで、なおかつこのときに1号がベントに入る、炉心は溶けていない、外に出ない、水位プラス1mと書いてあるのです。これは私が混乱しているのかもしれませんが、ここの時間のずれは、ただ3時前の時点で2号なのか1号なのかみたいな声があったのも、私なりにもうっすら覚えていますが、しかし、私の中では途中からほぼ1号にシフトしたような感じなのですけれども、ここは微妙に時間がずれています。ですから、若干そこは気になりました。

○質問者 当初2号が危ないと。

○福山前副長官 はい。当初、2号は危ないというのは認識しています。

○質問者 それが1号に替わったタイミングというのは。

○福山前副長官 途中で1号に認識したのは、私は実は日が明けたすぐぐらいではないかとなっているのです。そうでないとここは明確に1号はベントに入ると書いてあるのです。

○質問者 それは0時57分のこの議論のときのベントということですか。

○福山前副長官 そうです。ちゃんとここに2時20分総理の福島で順番がありますから、多分そんなにずれて書いているわけではないと思いますので、実態としてはそういうことだったと思います。これは中間検証は理解いただいているのでしつこく申し上げませんが視察のお陰でベントが遅れみたいな話は若干無理があります。確かに吉田さんがそこで指示系統から離れたことは大きかったかもしれませんが、我々の中では先ほど申し上げたように3時にベントが始まって、その後、ベントがもうできていると思っていたのが実態です、それが官邸側の状況です。

先ほど言われていた官邸5階と中2階と危機管理センターの関係も、済みません、生意気ながら若干中間検証は官邸5階にシフトしすぎのような気がします。官邸5階に移ったのは、実はその後です。なぜ官邸5階に移ったかという、よく携帯電話の話が出ますが、危機管理センターに携帯電話がじゃんじゃん鳴ったら仕事になりません。例えば政治家の携帯電話が危機管理センターに入っているときに変な話ですけども、マスコミから電話がじゃんじゃんかかったら、そんなの仕事にならないです。変に漏れて大騒ぎになります。私は危機管理センターで携帯が繋がらないというのは合理的だと思っています。

どうしても携帯にかかってくる電話があるので、それは危機管理センターから歩いて1分もしないところにつながるところがあるのでそこに行ってチェックをしていたというのが実態なので、携帯が繋がらないことが問題だったかという、実は私は携帯が繋がった方が危なかったような気がします。

実態として申し上げれば、有事、特に安全保障上の有事やこういった緊急の災害のときに携帯が危機管理センターにつながらないというのは、実はどちらが合理的かはわかりま

ました。だから、総理もそこはわかっていたので、淡水がなくなったら海水だみたいなのはちょうど12日の昼前後の議論ではあったと思います。

現実問題として次の質問、水素爆発に移るのですが、こんな長くなってしまって済みません。大体今のが初期の時系列の状況です。

○質問者 初期の今の部分で何点か教えていただきたいのですが、中2階で最初の3 kmの避難指示の議論をした。そのときには総理もおられてその場で一気に総理以下で決まったという流れであったと。

○福山前副長官 はい。

○質問者 3 km、なぜ3にしたかという部分は覚えてらっしゃいますか。

○福山前副長官 今申し上げたとおりです。まずもともとが2 kmになっていませんか。

○質問者 2 kmは福島が出しているのですね。

○福山前副長官 それを私たちは知らないのですが、防災マニュアルはなんて言われていましたか。3 kmでしたか。

○質問者 マニュアル上、何 kmで先に出せということは書いていないのです。

○福山前副長官 3 kmぐらいまでは準備ができていますみたいなのが保安院からあって、それで結果として一遍に出したら近くの人が簡単に言うと渋滞とかになると出遅れると。まず近くの人を出そうと。そんなに広くなくていいという話は班目さんからもあったので、そこで避難の指示は3 kmにしたと思います。

○質問者 近い人を最初に逃がさなければいけないのでというような議論をだれがされたかというところまでは記憶はないですか。

○福山前副長官 実は当時の会合の様子というのは、相当余り役職とか関係ありません。みんなが簡単に言うところではどうなんだ、あれはどうなんだという中で収斂していった実態のところなので、具体的に誰が言ったかというのはわかりませんが、現実問題としては近い人からやらないと遠い人は逆に言うと逃げられる可能性は高いので、近い人からというのを優先したような気がします。

○質問者 この3 kmの避難を決めた段階で、班目さん辺りなのですが、ベントをするにしても管理された下でベントをするのであれば3 kmで十分なんだというような発言をした。それはお聞きになったことはありますか。

○福山前副長官 言っています。

○質問者 それは班目さんですか。

○福山前副長官 班目さんです。

○質問者 というのは、班目さんはこの3 kmを決めたときには私はいなかったのではないかという話。

○福山前副長官 いなかったのか、いたけれども、どこかに行っていたのか、それはわかりません。だけれども、少なくとも寺坂さんや班目さんには確認しているはずですよ。

○質問者 決まった後で、9時過ぎに班目さんはまた戻ってきていたのですか。

- 福山前副長官 官邸内にでしょうか。
- 質問者 官邸にです。9時20分が3kmの避難指示。
- 福山前副長官 もうちょい遅くないですか。
- 質問者 午後9時20分ですね。
- 質問者 23分。
- 福山前副長官 9時23分ですか。もうちょい遅くなかったかな。福島はいつでしたか。8時何分でしたか。
- 質問者 8時50分です。
- 福山前副長官 でも、班目さんがいなかったとしても多分保安院か何かが言っています。
- 質問者 10kmから20km拡大するタイミングを後でお話を伺います。
- 福山前副長官 15日ではないか。
- 質問者 12日の夕方。
- 福山前副長官 夕方、水素爆発の後ですね。
- 質問者 後です。10kmから20kmに拡大することになったと聞きますけれども、先に10kmでまだ避難が終わっていないうちに拡大すると逃げる人も渋滞で逃げられなくなるという話があるときもまた出ていますか。
- 福山前副長官 出ていません。だって、水素爆発を見ているから。
- 質問者 先生は今言われた狭く設定して拡大していかないと渋滞が起こってしまうというような議論、そういう理由を述べられた方がいらっしゃっているということですがけれども、それは先生の今持ってらっしゃいますノートの中にはありますか。
- 福山前副長官 ノートにはないです。
- 質問者 次のものをいいですか。10kmに拡大していますね。10kmに拡大するときというのが先ほどの福山先生のお話ですと、もう5時半ごろに総理がセンターに下りられてまたベントしていないのだという報告を受けて、そこで。
- 福山前副長官 5時過ぎ、5時44分に言っているはずですよ。
- 質問者 そこで拡大した方がいいのではないかという話が出て、かなり短時間でも決まったというような印象であったと。
- 福山前副長官 決まりました。それは外見上は短時間ですが、私たちから言うと5時間経っているのです。ベントを決めたのは短時間なのですがけれども、私たちの一緒の中で言うと、5時間経っていて、爆発はいつするかわからないというどきどき状況なのです。だから、そこは短時間で決めたというのではなくて、逆に言うと長時間かかりすぎているという感じで早く避難の指示を出したいという意味合いです。
- 質問者 では、拡大すべきなのではないかという議論はもっと早い段階から。
- 福山前副長官 いや、していないですよ。だって、ベントが終わると思っていましたから。
- 質問者 終わると思っていたのでということですね。すると、このときも総理が中2階

に来られて、その場でもう決まったという。

○福山前副長官 決めました。

○質問者 官房長官も下りてこられていましたか。

○福山前副長官 官房長官もいらっしゃったと思います。ただ、そこは入れ代わり立ち代わりだからどの瞬間にどういう形でちゃんとみんなが着座していたかはわからないのですけれども、ただ、官房長官はそのときはいたと思います。

○質問者 中2階の話ですね。

○福山前副長官 中2階です。

○質問者 済みません、10kmの3の次が10になったというのも、保安院あるいは班目委員長辺りから、次拡大するのであれば10というような数字が示されたのか、その辺の御記憶というのはございますか。

○福山前副長官 これは20、30は全く準備がないのです。

○質問者 なので10と。

○福山前副長官 現実問題として、班目さん辺りからは10もあれば十分だみたいな話が多分出ているのです。もう一点申し上げれば、我々が避難指示を出すときに重要なのは、そのときにそこまで意識があったかどうか正直言って自信がありませんが、避難場所を確保しなければいけないのです。20から30となると、同心円状で言うと人口が一気に増えるのです。これは伊藤さんがよくこの議論をされました。伊藤さんはそれは無理ですと。

○質問者 20から30のときですか。

○福山前副長官 20から30のときもそうですし、20から30のときはそれが主たる理由です。それともう一個あるのですけれども、20から30のときはしますが、そのときは10kmにとどまったというのも大きくしすぎても、それはまず近い方から逃がすのだというのが最初の段階です。このころはとにかく私たちは爆発するのではないかということばかりです。政治的に言うと、とにかく被曝者を最小限に抑えたいというのが我々の最大の目的です。だから、その場を若干想定していただきたいのは、私たちから言うと現地の状況が混乱しているのはもう所与のものなのです。そうすると、だれかが意思決定しなければいけないわけですし、ベントが言っているように遅れているということは、爆発するかもしれないのでとにかく早く逃がしたいから、とにかく5時44分、早く逃げてもらおうというのが正直言ってすごいわかりやすい議論で言うとそういう話です。

○質問者 わかりました。

○質問者 それは福山先生が頭の中でそのように思っていたのと、実際に言葉で。

○福山前副長官 出しています。みんな出しています。だれかが出しているかは別にして、みんなそういうことを言い合いながら、では早く避難指示を出そうという感じでした。

○質問者 今の御説明で1点お聞きしたいのですけれども、ちょうど3月12日の朝の7時45分、総理が現場に行っているときなのですが、福島第二原発の方の3kmの避難指示というのが出ているのですけれども、この部分について御記憶があることはございますか。

○福山前副長官 3 km の避難指示は措置命令を出しましたね。措置命令が6時50分ぐらいではないですか。6時50分ぐらいに措置命令を出して、早くベントをやれと言っているのですけれども、なかなか進まないから爆発のリスクはありますね。そうすると、これは福島は3 km は10 km には入らないのでしたか。

○質問者 2F の3 km は10 km だと入らないです。

○福山前副長官 これは逆です。第二原発の炉でも同じような状況が起きるのではないかという議論をしたのではないかなと思います。つまり、第二は第一に比べると安定しているわけですね。そのときに多分第二も第一と同じようなことが起こらないのか、早めに出しておかないでいいのかみたいな話の中で出したのではないかと、うっすらと記憶しています。

○質問者 ちょうど第二原発も15条通報が5時22分から6時7分にかけて入っていて、第二原発においても原子炉の圧力抑制機能が喪失したという話が出てきて、これの議論というのもやはり中2階ということになるわけですか。

○福山前副長官 中2階です。だって、そのときは総理がいないでしょう。

○質問者 このときもう総理が出ていた。

○福山前副長官 だから、官房長官と海江田大臣だと思います。

○質問者 それは中2階にそのころはまだおられたと。

○福山前副長官 中2階です。先ほどの避難の総理の5時44分も、その話をして5階へ1回上がって総理は出ていくのです。つまり、そこで中2階でしゃべっていたものを上へ上がって決めて実はぶら下がりをしてへりに行くので、これは本当にその場の状況なのですけれども、どちらで決めたかと言われると余りよくわからないのです。みんな流れ作業でやっていますので。だけれども、少なくともその流れです。だから、かちっと5階で会議をしたとか、中2階で今から会議をやりますねと言って会議をしているわけではないので、だから、先ほどの私の記憶がほぼそれで間違いがないのですが、二号でも15条通報か何かがあったので、多分二号の3 km の指示を出したのだと思います。

○質問者 ここまでの部分で最初の緊急事態宣言の話の際に、総理が与野党の党首会談に行かれたという御説明をいただいたのですけれども、その当時の議論として、総理は行かれる前に先に発出してしまった方がいいのではないかとか、逆に与野党党首会談は相手を待たせるのもあれなので、きちっと対応した方がいいのではないかとか、そういうやりとりというのはございましたでしょうか。

○福山前副長官 もう党首会談はセットされたので、行くだけ行って、さっとあいさつして帰ってくるから、とにかく中断という感じです。

○質問者 その総理が行かれている間に、これまで聞いた話の中で法律を調べたり原災法というのがどういうものであって、どういう手続を取られてというようなことを官房長官以下で調べられたというようなことも聞いておるのですが、そういうことを。

○福山前副長官 それは結構いろんな場面でやっているもので、同様に常に総理の秘書官は

入っておられたので、秘書官に原災法上はどんなことができるのかということから、今どういう状況なんだみたいなことは確認しました。ただ、そのときにどの程度やったかはわからないですけども、総理がいなくなってからいろんなことをしゃべっているのです。だから、電源車の手配とかもそのときに出たりしている。

○質問者 わかりました。

○質問者 その場面でもこんな事態だから、もう党首会談を中止みたいな話がありましたか。

○福山前副長官 それはあり得ないです。だって、野党の協力を得なければどうしようもないですから。野党の協力を得ないと震災対応などはできませんから。

○質問者 そのときは震災対応についてということですか。

○福山前副長官 勿論です。

○質問者 震災対応が話題になって党首会談があった。

○福山前副長官 勿論ですよ。

○質問者 協力しますよという。

○福山前副長官 向こう側にやはりこの事故が起こっているのです、野党に対して協力要請をして野党側にも今の現状について報告しなければいけないという話の中での党首会談ですから、別に政治的に政策協議をするために党首会談ではないので、それは逆に言うと、いかに失礼のないように丁寧にするかということが優先順位です。

○質問者 もう一点、総理が現地に視察をされたということなのですが、ベントがまだできていないから総理が現地に行くことを決めたというよりも、時系列的にはもう少し早い段階で総理が行くことが決まっているようなのですけれども、これは何か具体的にきっかけがあったとかというのは。

○福山前副長官 総理はとにかく行きたいというときには2つあったのです。

1つは、原発の状況ですけども、もう一個は当時は真っ暗で津波の被害が全然わからないのです。先ほど言ったように10時の段階でまだ亡くなった方が88人ですから全然把握ができていないのです。だから、総理としては明るくなった瞬間に上空からでも津波の状況を見たい、原発の状況も確認したい。2時ぐらいの状況という、相当総理の中で言うとストレスがたまっているのです。班目さんとしゃべっていてもよくわからないし、武黒さんとしゃべっていてもよくわからないし、保安院の人間としゃべっていてもわからないので、では私が直接吉田とやるという感じだと思うのです。それと津波の状況を上からでもいいから、明るくなったら見たい。そうでないと総理はもうオペレーションできないですから、外でなどはあり得ないので、だから逆に言うと日の出とともに出たという感じなのです。

○質問者 それは総理から直接そういうお考えを聞かれたということですか。

○福山前副長官 政治家同士ですから、暗黙の了解とか、そうなのだろうなと思います。

○質問者 これは今になってなのですけども、当時指揮官が現場に入ってしまって指揮

所を離れるということについていろいろ言われるところもあるかと思うのですが、福山先生御自身は行かれるということについてどのようなお考えで、何か総理に申し上げられたとかそういうことはありますか。

○福山前副長官 私は逆にちゃんと福島だけではなく、津波の被害も見てくださいということでは言いました。それは下りられないという判断をしました。私は時間がこれは書いてあるのです。実は津波の被害は総理は下りたいと言ったのですけれども、下りたら現地に迷惑をかけるからやめてくれという話と、下りると戻る時間が午後になるのです。とにかく官房長官と話していたのは、午前中のうちに総理に帰ってきてもらおうという話をしたので、だけれども、行くことに関していえば、私はそんなに抵抗はありませんでした。

これは仮説の話ですから意味がないのですけれども、行かなかつたら現場も見ないで指揮したのかと今度はマスコミにたたかれるのです。政治ってそういうものですから、それはどちらにしてもたたかれるのです。結果論で行ったか行かないかというのは私は余り関係ないと思っていて、現実問題として最高指揮官であろうがなかろうが、意思決定はそうやってみんなで合議でやっていましたから、当時は枝野官房長官が任されていればそれで十分でしたし、海江田さんもそのために残ったので、私自身はそのことが何らかのそれから先の事故対応に影響があったとは思いません。

ただ、びっくりしたのは、吉田さんが明け方になって総理が来るのを知って慌てたという表記が中間報告にありますね。あれも私はびっくりしていて、そんなこと絶対ありえない話です。2時20分に行くことを決めているわけだから、それは総理の秘書官から東電側にも絶対連絡は行っているわけですから、ということは東電側で本当に連絡をしていなかったらそれは東電側の問題だし、もしそこで作業が厳しかったら、今作業は厳しいと言って止めるべきだったかもしれない私は思っていますし、中間検証の表記を見て総理の視察に関して言えばびっくりしたのはそこです。

○質問者 済みません、先ほどちょっと話が中断になってしまったのですけれども、1号機の爆発の辺りからまたお話しいただけますか。

○福山前副長官 1号機の爆発は、当初は白煙が上がっているという報道と報告がありました。白煙が上がっているという報道があって、私は総理の執務室に班目さんといました。このときも山口公明党さんと党首会談か何かやっていませんか。

○質問者 と聞いております。

○福山前副長官 そのときには総理のところにはまだ上がってなくて、それから戻ってこられたときに白煙が上がっているという報告が上がりました。白煙が上がっているというのは何だみたいな話を総理が班目さんに聞いたら、班目さんは原発というのは揮発性のものがたくさんあるのでそんなのが何か漏れているのではないですかみたいな話が実は入ってきました。結果として早く報告を上げろ、わからないのかみたいな話がどうのこうのあっている中で、日テレが報道したのは何時でしたか。4時49分かな。福島ではすぐに流れましたけれども、全国ネットに流れたのは多分1時間10分後ぐらいだと思います

ので、4時49分ぐらいにその映像が流れ出したのを、これはあちこちで報道になっていますが、寺田さんが飛び込んでこられて、今、映っていますと言ってテレビを付けられました。もう一生懸命リモコンを操作されたのを覚えています。

そうしたら、完全に皆さんもごらんいただいている映像だと思いますが、建屋が吹っ飛んでいます。爆発ではないですか、何が白煙が上がっているんですかと、総理と私はほぼ同時ぐらいに叫んだと思います。白煙ところではないではないですかと言って、総理は私の記憶では、「あんな爆発だったら現地人間はわかるだろうと、なぜ報告が上がってこないんだ」と総理は言われました。これもよく言われている話で、これは寺田さんと私が外で言っているのしょうけれども、班目さんはそのときに爆発の映像を見て、あちゃーという顔をされました。

これは余談ですが、寺田さん、菅総理は視察のときに水素爆発がないという班目さんの言葉を聞かれているそうです。私は視察に行っていないのでわかりません。ただ、後に注水の問題で報道されたときに班目さんと呼んで、私が班目さんにゼロではないと無理やり言わせたという報道になっていますから、それは班目さん自身が自分で認められた話で、私はそういう言い方をするかもしれないと言われたのですけれども、そのときに実は私、人払いをしてもう一度班目さんに確認しました。班目さん、もう一個だけ聞かせてくれと。要は水素爆発について、総理や寺田さんは別に、私たちに水素爆発の可能性について言及されたことは、1号機の水素爆発までに一度もありませんでしたよねと申し上げたら、そのことについては一切自分は言っていなかったと。自分は格納容器についての爆発については頭がいっぱいだったので、要は建屋が水素が入って爆発することについては頭の中になかったと、私のサシの場面では言われました。

だから、そう思うと、あそこであちゃーとした顔をされたのは何となくわかるのですけれども、ただ、そのときも総理は別に怒りもせず、あれは爆発ではないか、あれはどうなっているのだと、そうしたら、済みません、私は相変わらずど素人なのでそのときに班目さんに聞いたのです。あれはチェルノブイリ型の爆発なのですか、チェルノブイリと同じことが起こったのですかと聞いたと思います。

とにかく早く報告を上げてこいと言ったのですけれども、全然上がってこなくて、実はこれを見ていただければと思いますが、これは17時36分、原子力発電所1号機付近の白煙発生ですが、ここは17時36分で、17時40分プレスとなっていますが、5時40分の時点で私の手元にあるペーパーでまだ白煙が上がっているのですから。

つまり、簡単に言うと、4時49分か何かにテレビで放映があるにもかかわらず5時40分、ほぼ1時間経っているのにまだ白煙が上がっているのですから。なんでこのペーパーが私のところに残っているかという答えは簡単で、5時45分から枝野官房長官の会見があるからです。会見のときにはそれぞれの担当省庁の人間と官房長官秘書官が全員集まって、それぞれの状況、それは地震・津波、原発事故、例えば当時で言えば交通の遮断、

そういったことについてありとあらゆる情報を官房長官に渡して、それで会見に臨まれます。17時45分から枝野官房長官会見があると思いますが、その手前にこれが多分回ってきているので、そのときにいまだにこの白煙状況です。

なんであんな爆発しているのにいまだに白煙なんだと言って、情報持ってこいと言って怒っていたのが実態で、これは新聞報道によくありますが、執務室で私が官房長官にこれでは会見できませんと、説明しようがありませんと。なんであの爆発が起こっているのかわかりませんと、会見の時間をずらしましょうかと聞いたら、枝野さんがうーんと考えられた後、これだけ映像が流れているのに会見を遅らせたら政府は何か隠していると言われるよねと、私は会見やりますよと官房長官が言われていました。それを総理が何とも言えぬ顔をして私たちのやり取りを聞かれたような顔をした中で、総理は一言「やってもらおう」とおっしゃいました。これが当時の水素爆発の状況です。

これは後で私はNHKスペシャルでわかったのですが、保安院が何かの会見をしたいとその前に言っているのに、官邸から止められたという議論がありました。私は全くそのことは知りませんでした。NHKのNスペで私はそんなことが起こっているのだということがわかって、Nスペの報道でいきなりインタビューのときにそのことを聞かれて、私は正直言って困ったのですけれども、当時、保安院がやっている記者会見などは我々はほとんど念頭にありません。なぜならば、その保安院のやっている記者会見とか資料を基に全部官房長官がそれをベースに逆に言うと会見をしていますので、保安院が個別に会見をやっていたという認識もひょっとしたらないかもしれないぐらいです。

つまり、これは私たちの問題もあるかもしれませんが、政治家だからとか、官邸にいるから全部がわかっているわけではありません。どの省庁でどれがどういう動きをしているか全部把握しているわけではありません。少なくとも官房長官と私の中では官房長官の会見が国民に対する唯一、もっと言えばクレディビリティを担保できる最もあの時点では官房長官会見が信頼性が高いものだと思っていましたから、そのことをいかにきちっとやるかの方が優先順位が高いので、実は保安院がどうのこうのという話は私も官房長官もそのときは何も知りません。

ただ、1つ疑問に思うのは、当時保安院は何を会見しようとしていたのだというのが私なりの疑問です。だって、保安院から来ているペーパーがこれで、保安院が私よりも前に会見するって何考えていたと。白煙が上がっていますと会見するのかと。私たちから言うと完全にそういう感じです。これは後付けの議論です。当時はそのこと自身知りませんから。

官房長官に会見に行ってもらって、官房長官が言われた爆発的事象というのは、官房長官の御本人の考えられた言葉です。こういう言葉が使われたと私は横で拝聴していて、何となく、ああなるほどと思ったのを覚えています。爆発的事象とそこは使われていますね。でも、現実にあの会見をやられたときはまだ官房長官は水素爆発の状況を何もわかっておられませんから、私たちの中ではチェルノブイリ型の爆発がとうとう起こってしまっ

たのかと心の中では半分以上思いながら、事実関係はわからない中であの会見をしたので、相当あのときは重い気分でした。だから逆に言うとその前後です。10km 圏内、では 20km の避難は。

○質問者 その後ですね。

○福山前副長官 その前後でしょう。

○質問者 はい。

○福山前副長官 だから、そのときには水素爆発がチェルノブイリ型の爆発かわからないので、少しでも避難の箇所、避難を大きくしようと、最初言っていた原則どおり大きくしようというのが実態です。

○質問者 水素爆発の関係なのですけれども、15時半過ぎに伊藤危機管理監が福山副長官にお電話で現地で大きい音がしたという情報が入っただけけれども、御存じですかというような感じで電話で話されたというようなことをおっしゃっていて、福山副長官もその15時半の時点では知らないと回答されたので、伊藤危機管理監が上がって行って、総理等に対して今入っている情報ということで、爆発音がしたということと、どうも黒いものが飛んでいるようだというような話をしたということなのですけれども、それは御記憶にございますか。

○福山前副長官 先ほど申し上げた会合に伊藤危機管理監がいらっしゃった可能性はあります。だから、その場面だと思います。

○質問者 明確に覚えてらっしゃるというわけではないですか。

○福山前副長官 だから、その場面にいらっしゃったのだと思います。

現実の問題として言うと、どの場面でどの人が明確にいたかというのは結構記憶はあいまいなので、そこは申し訳ないですけれども、ただ、そこには多分いたから先ほどの話になったのだと思います。だから、その場面だと思います。

○質問者 その場面というのは、先ほど総理が党省会談をしていて。

○福山前副長官 党省会談の後。

○質問者 平岡さんもないので。

○福山前副長官 白煙が上がっている。

○質問者 その同じ場。

○福山前副長官 そうです。その同じ場です。伊藤危機管理監もいたということ。

黒い煙が上がっているかどうかの記憶はありません。ただ、白煙が上がっているというのは報道も含めてあったので。

○質問者 総理がその場にいた東電の人等にいろいろ聞いても全然がらちが明かなかった。

○福山前副長官 らちが明きませんでした。

○質問者 そうこうしているうちに4時半ごろのテレビにある。

○福山前副長官 4時■9分。

○質問者 これで初めて爆発ではないかという話になった。

○福山前副長官 そうです。映像を見て。

記憶はありませんが、その爆発の写真か何かは福島のアフサイトセンターか福島県庁か何かに送られてきたというのがその前後にありませんでしたか。

○質問者 ありますね。

○福山前副長官 ありましたでしょう。あれは私たちは夕方遅めにわかるのです。それでなぜ福島とかに行っているものが官邸に来ないんだと言って怒りまくったのは記憶にあります。

○質問者 どなたが怒りまくったのですか。

○福山前副長官 みんな怒っていました。そのときは総理は余り怒らないのです。枝野さんとか、私は相当怒っていたと思います。

○質問者 やはり広報担当をされている中で福島にある情報。

○福山前副長官 そういうレベルではないです。なぜこんな重要な情報が片方だけに行っ
てこちらに来ないんだという感じです。申し訳ないですけども、余り系統だった話ではないのです。もう水素爆発の時点で前の日からずっと続いているわけです。ベントが遅れている話、途中で保安院の院長が消えている話、これは後付けではなくて、どんどん不信感が高まるのです。班目さんがちゃんとした話、白煙が上がっているというのは揮発性が何かのものが燃えているのではないですかみたいな話も含めて、挙句の果てには官房長官の会見の前でも全然情報が上がってこない。挙句の果てには福島には写真か何か行っている。何なのだからこれはという感じです。

○質問者 話が時間的に戻ってしまうのですけれども、先ほど炉心といいますか線量が上がっている、ベントができないという話がありました。それが12日の午前。

○福山前副長官 5時前後でしょう。4時半から5時半の間ぐらい。

○質問者 5時頃の話で、ベントができない理由として線量が高いのだと。これは菅総理もその場にいらっしゃって。

○福山前副長官 いた場合といない場合と両方あります。

○質問者 菅総理は物理の方も専攻されていたという、この段階で炉は溶けている、炉心は溶けているということは。

○福山前副長官 先ほど申し上げたように、炉心は溶けていないと明確にベントの準備のときに言われるわけです。水はプラスいくつぐらい。

○質問者 それは菅総理ではないですね。

○福山前副長官 これは向こう側でね。総理が頭の中でどう思ったかはわかりません。

○質問者 特に溶けていないのだったら線量が上がるわけではないだろうという話はあるのですか。

○福山前副長官 正直言うと一部の損傷ぐらいはあるかもしれないというのはどこかでみんな思っているかもしれませんが、ただ、ベントをしようからベントしたら回避できるというのが前提で物事が進んでいますから、実態はそういうことです。

いまから話すことは完全に後付けですけれども、そのときに本当に炉心溶融が起こったりメルトダウンしているという認識が東電側にあれば、逆になぜ総理の視察を受け入れたのだという議論も成り立つのです。だって、私たちはそんなことはわからないですから。

○質問者 拒否できる人たちがみたい点もありますけれどもね。

○福山前副長官 それはそうなんですけれどもね。 [REDACTED]

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 それで問題の注水ですね。

○質問者 はい。

○福山前副長官 問題の注水ですが、6時45分から官房長官の会見に私は同席をします。途中から、このぐらいのときから、総理執務室ではなくて、例の問題の5階応接室になります。執務室の隣。この準備をホワイトボードを始めとして準備をしたというのは私ではありません。これは全部寺田さんと秘書官がやりました。

一方で、私は逆に別の危機管理センターや官房長官と地震のオペレーションもしているので、ここから先はいろんな場面で私は飛び飛びになります。官房長官の会見に同席した後、総理の執務室ではなくて応接室に飛び込みます。そうしたら、例の水を入れる、入れないの議論になっていて、武黒さんから水を入れるのに2時間程度かかるという話がありました。これは水素爆発も含めていろんな機材等が管とかポンプ等が生きているかどうか分からないので、水が海水注入が入るかどうかを全部調べなければいけませんから、その準備に2時間ぐらいかかりますという話がありました。結果として、2時間かかるんだなという話をわっとしているときに、1つは総理から塩水を入れて大丈夫なのかという話がありました。このときには塩水を入れたら固まるのか、何かそんな話が出てまいりました。もう一点は、総理から再臨界はなのかという問題提起がありました。これはまた班目さんからは、はっきりと私には言ってくれたのですけれども、ゼロではないということを行いました。

中間検証は違う表現になっているので私はびっくりしたのですけれども、 [REDACTED] ですから、私には明確にゼロではないということを書いて、自分は科学者としてそういうことを言う可能性はあのときにはあったということは言ってくれました。

一方で、細野さんが5月ぐらいのあのときに班目さんともめたのは、可能性があると言ったと細野さんが会見で言ったので、班目さんは怒ったのです。そんなことは学者の端くれとして言うわけがないと言って怒ったのです。私はでも班目さんゼロではないみたいなことはよく言われていましたよねと言ったら、それは言ったかもしれないと私に認められて、その後、私はびっくりしたことを言われたのですけれども、自分が言うゼロではないということは、それは科学的にはほとんどゼロに等しいのだと、自分の心の中ではと私におっしゃったのです。そんなこと言っても、原子力安全委員会の委員長にゼロ

ではないと言われたら、素人の私たちはあるかもしれないと思いますよねと言ったら、そんなこと言っても科学者としての自分はゼロではないというのはほとんどないに等しいんだ、心の中、頭の中ではそういうことだと言われて、私は閉口したのですけれども、逆に検証委員会の表現は違う表現になっているので、確かにゼロではないようなたぐいの表現をされました。

私ははっきり覚えているのですけれども、2時間準備にかかるのだったら、その間に安全委員会の方で再臨界の可能性はないのかどうかをちゃんと調べておいてくれと総理は言われたのです。わかりましたという話があって、それで実はでは2時間後に結果を持って集まりましょうと言って散会したのです。でも、そのときにはまだ水素爆発の状況はわかりません。実態として申し上げれば、東電の武黒さんが慮ってやめろとか、吉田さんがそれを無視して入れたとか何とかというのは、私たちは全くいずれにしろ知りません。これも話は私は個人的にはあちこち変わっていると思っているのですけれども、例のTBSや読売の報道が出てから随分実は中身も変わっていると思うのですけれども、検証委員会はお持ちかもしれませんが私は幾ら探してもなかったのですけれども、最初のクロノロジーは試験注水になっているのです。最近のクロノロジーは試験注水の「試験」というのは消えているのです。

私は実態はわかりません。東電内部の実態は何が本当か全くわからないので、そこは変に邪推をして申し上げるのはよくないと思いますので、少なくとも総理が注水を止めろと言ったことはありません。ただし、総理は再臨界と塩水で大丈夫なのかということは確認されました。2時間かかるのだったらその間に確認をしてくれと言って散会しました。7時36分、当時の細野補佐官が東電と連絡を取って来られました。これが当時、今度は総理の執務室です。執務室に補佐官が入ってこられたときの私のメモです。

モニタリングカーで14時、15時とあって、15時36分、水素爆発が起きます。モニタリングカーは14時と書いてあって、15時36分は水素爆発です。46分に860、たぶんmSvだと思いますが、こうやって落ちていきます。細野さんはここで総理に、もし格納容器の爆発ならどんどん線量は上がっているはずなのですからけれども、ここで落ちていたので、実は建屋の爆発ですと、水素爆発だと思いますということをやっと初めてここで細野さんから報告があります。その後、細野さんから、ポンプ動きます、管生きていますと、制御棒は臨界を未然に防ぐので入っていますから大丈夫ですという報告があります。20時まで確認をもう一回して、ゴーサインをしましょうという話が細野さんから7時36分です。なぜ7時36分かという、私の秘書官のノートには7時36分と書いてある。7時46分か36分です。

○質問者 このページはコピーを取らせてもらってよろしいですか。

○福山前副長官 いいです。

私たちはこれで初めてポンプが動いて管が生きているので、水が入るということを確認できたので、なおかつ再臨界の話も防げるということも報告を受けたので、では水を入れ

ましようと言って20時20分か何かに水を入れろという注水指示を正式に出すことになります。その間、入っていたか、入っていないかなどというのは我々は知ったっちゃありません。だから、当時の東電のあれがどうあろうが、そこは私は知ったこっちゃないのですけれども、少なくともその状況が現実には私の記憶の中ではそういう状況でこのときの対応があります。

○質問者 この注水の関係で3点ほどお伺いしたいのですけれども、中間報告にも書かせていただいた部分で、水素爆発によって一部組み立てた注水ラインが現場においてどうも吹き飛んでいるようなのです。そういうことが具体的に起こっているというような情報というのは東電からもたらされたのですか。

○福山前副長官 勿論、水素爆発で現場がぐちゃぐちゃだから、だからこそ管が生きているかポンプが動くかわからないから時間をくれという話でした。結果として実は中間報告でも気になった表記があって、武黒さんが指示を受けたみたいな評価になっていますね。3つあって3つ1、2、3と書いてあるのです。あれを武黒さんが指示を受けたと書いてありますが、逆です。こういうことをしなければいけないので時間がかかるので1時間半かかりますというのが向こう側からのプレゼンです。それはしようがないねと、早く水を入れなければいけないのだから、海水でも何でも入れなければいけないのだから、早くそのことを確認してくれと。ただし、再臨界はないのかという話と、塩水を入れて大丈夫なのかということを確認して、ではどうせ準備にかかるのだったら1時間半後に戻ってきてねと言ったら、そのときには2回目のときには、実は班目委員長は来ませんでした。

委員長代理はだれでしたか。

○質問者 久木田さん。

○福山前副長官 久木田先生が来られてここに書いてあるように、制御棒が臨界を未然に防ぐので大丈夫ですという、再臨界はありませんという話が実はあって、細野さんからまず水素爆発で放射線量が落ちていきますという、建屋ですということと、管が生きていて水が入りますから、水を入れられますという報告を行って、では入れようと言って用意ドしたのが現実に8時20分です。

○質問者 わかりました。この点に関してもう一点、保安院から出てきている時系列のなかで17時55分くらいに海江田大臣が既に海水注入をすべしという指示を出されているのですけれども、そういった指示が既に出ていることについてね、官邸の5階で情報が共有されていたとかそういうことは記憶にございますか。

○福山前副長官 ここが私は実はわからないところで、正直言ってわからないのですけれども、私は先ほど申し上げたように17時45分から官房長官会見に同席しています。17時55分は正直言って実は私にとってはエアポケットみたいな時間なのです。水を入れるという指示を出したから管とかの対応をしなければいけないので1時間半かかりますと武黒さんが答えたのか、海水注入するしかありませんと、もう淡水はなくなりましたと、水素爆発は起こったけれども、水を入れ続けなければいけないのでやりますからというとき

に、実は後付けで経産大臣の指示を付けたのか、ここは済みません、私はわかりません。ただ、総理の注水を中断した指示みたいな話が後で出てきたことは、私にとっては大変そこは不信感を持っていて、海江田大臣の指示は出たと思います。紙が残っているはずですから、それは一旦出たんだと思いますが、後で総理がやめろと言ったみたいな話というのは完全に意図的につくられた話だと思っています。

○質問者 そうしますと、5階の雰囲気というのは、もう海水を入れるしかないのでは総理に報告に行くという形なのか、そもそも海水を入れるべきか否かについて総理に御判断を仰ぐ。

○福山前副長官 違う。海水を入れると、入れなければしょうがないですねという話の中で総理から大丈夫かという確認のあれが来たということです。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 もう入れること前提です。ただ、入れろと言っても、東電から何が返ってきているかというのと、入れたいのですけれども、入られるかどうかわかりませんと、それは管が生きているかどうか確認しなければいけないし、ポンプが動くかどうか確認しなければいけないし、爆発の後の状況がありますので時間がかかります、2時間ぐらいかかりますと言われたので、ではこれとこれはどうだと。そんなことは私たちは発想しないのですけれども、総理は逆に言うと再臨界は大丈夫なのかと、塩水は大丈夫なのかと逆に確認されたら、では、その部分はちゃんと調べて連絡します、どうせ準備に時間がかかりますから一緒にと言われたのが実態です。だから、例の7時何分でしたか、46分か何かに水を入れてそのまま入れ続けたりとか入れ続けられないとか、全く私たちはあずかり知りません。特に武黒さんがやめろと言ったとか言わないとかやりとりがあったとかというのは、全く私たちは知りません。

○質問者 わかりました。この点に関しては最後なのですけれども、班目委員長から久木田代理に代わられたということなのですが、委員長は物理的に官邸から出られたのですか。まだ議論が収束していない中で委員長自身がいなくなるというのは。

○福山前副長官 班目委員長がどこに物理的に消えられたかまでは私たちは到底把握できないですけれども、その場では久木田さんが来られたことだけは間違いありません。

○質問者 わかりました。

○質問者 印象としては、班目さんがいなくなったということについてすごく印象に残っているということですか。

○福山前副長官 印象に残っているというか、久木田さんが来て淡々と報告されたので、多分そのときは再臨界も起こらないし大丈夫だからもうその程度だったら久木田さんが代わりに来たのだなぐらいにしか私たちは思っていないです。そこはそんなに悪意で取っているわけではないです。

○質問者 吉田さんが本社、社長から電話がかかってきて水を止めろと言われて、これはだれが言っているのだということを官邸筋からの絶対命令だと社長から聞いたとか、そう

いうことを吉田さんが言っているのですけれども、それは東電内部の問題だから。

○福山前副長官 東電内部の問題です。

○質問者 社長がなぜそういう言い方をしたのかよくわかりませんが。

○福山前副長官 つまり、余り私は検証委員会の皆さんに先入観とかを与えてはいけないかなと思っているのですけれども、この注水の話は後からつくられた事実は結構あると思っていて、それ以外も含めて後からつくられた事実というのは、私は幾つかあるなという感じをしないでもあります。しかし、あそこはそれはそういうところですからしょうがないかなと思っています。

だから、逆に言うと、最後に申し上げようと思ったのですけれども、その場時点で起こってきたことと、言葉は悪いのですけれども、後からアリバイ的にでき上がってきたものすみ分けというのがすごく重要だと思うのです。

撤退の話もそうなのですけれども、後でまた 14 日の話になると思いますけれどもね。水素爆発はそんな感じです。

○質問者 わかりました。今の再臨界の関係の議論を官邸 5 階の応接室でされていたときに、ちょうど再臨界の可能性があるのかという話になって、第一原発の避難範囲を拡大させた方がいいのではないかという議論になったと聞いているのですけれども、その避難との関係の部分というのは御記憶はございますか。

○福山前副長官 避難は再臨界ではないでしょうね。水素爆発でしょう。

○質問者 水素爆発が起きて。

○福山前副長官 だって、当時はまだ水素爆発が何かわかっていないのだから。これがチェルノブイリ型の爆発だったらもっと避難させなければいけないのではないですかみたいな議論は出た可能性はあると思いますけれども、再臨界で避難ではないと思います。再臨界が起こるかどうか確認してくださいという話ですから。

○質問者 それで一旦ブレイクになったと。

○福山前副長官 はい。一旦ブレイクします。

○質問者 5 時 45 分からの。

○福山前副長官 官房長官会見。

○質問者 5 時 40 分でしたか。

○福山前副長官 5 時 45 分。

○質問者 5 時 45 分でしたか。官房長官記者会見が終わって戻られて、総理の執務室の横の応接室に来られたらこの海水注入の議論があったと。ここには総理もいらっしやっただので、先ほど話をお聞かせいただいたような議論があって、一旦ブレイクになったということですか。

○福山前副長官 そうです。

○質問者 問題は、今ちょっと話が出ました 1 F の避難の範囲を 10km から 20km に拡大する時間帯は 18 時 25 分、ちょうどこの議論がなされていると時間的に重なっていて、い

ろいろヒアリングで聞いているところによりますと、ちょうどこのブレイクの前辺りに出ているという話のようなのです。その話がまさに 10km から 20km に拡大するという避難の話が出たときに、福山先生はその場、応接室にいらっしゃいましたか。それともそのときにまた外に出られましたか。

○福山前副長官 多分いるでしょう。

○質問者 拡大について、3時半の爆発が原因でしょうと言われましたけれども、どんな議論があったのか、具体的にそのときも先ほどお話が出たように伊藤危機管理監から避難のフィージビリティといいますか、避難場所の確保的な話が出たのかもしれないなど我々は思っているのですけれども、どんな議論がなされたのか御記憶。

○福山前副長官 そのときは私はよくわからないのですけれども、水素爆発があってそれがわからない状況の中で、枝野さんの会見が終わってもまだ水素爆発の状況が見えないわけですね。ですから、そのことも含めてとにかく広げた方がいいのではないかという議論の中でやりましょうという話になったのではないかなと思います。そこは記憶が結構あいまいです。

○質問者 今、ちょっと再臨界と避難の関係について質問をさせていただいたのは、いろいろヒアリングでお聞きした中で、再臨界の可能性が否定できない、班目先生がそういうことをおっしゃっていたと。そうすると、そういう可能性があるのだったら、やはり避難範囲を拡大しなければいけないかという議論もあったのだという話がある方からありまして、なるほどねと、だからこの時間なのかと我々も若干合点がいった。なぜこの時間帯なのか。

○福山前副長官 私の印象は再臨界よりも水素爆発ですね。その議論があったかもしれませんが、水素爆発です。

○質問者 勿論、更に今後何かあるかわからないというほかの号機もございますし、そういう話もあるんですか。

○福山前副長官 ただ、総理の剣幕は相当だったのです。再臨界はないのか、再臨界はないのかと、その剣幕で若干危ないのだったら逃がしておかなければいけない、避難してもらわなければいけないと思った印象がある人がいても、それはあり得るかもしれませんが。私の印象は余りないのです。

○質問者 わかりました。

○質問者 時間がさかのぼってしまうのですが、この第一原発 20km の避難指示になっている注水の議論をする多分前だと思うのですが、5時39分に2Fの10kmの避難という、2Fが10kmに拡大されているのですけれども、ここはなぜ2Fで拡大したのかということの御記憶というのはございますか。

○福山前副長官 水素爆発です。

○質問者 1Fの水素爆発を受けて。

○福山前副長官 1Fの水素爆発を受けて、もう1Fは10kmを避難しているでしょう。

これは多分2F、重なるか、もしくは先ほどの2Fで同様のことが起こりうるかもしれないみたいな話と多分両方だと思います。だから、私は正直申し上げて記憶が定かではないのですけれども、どちらがプライオリティが高かったか記憶はないのですが、2Fで3kmにやったときは15条通報で先ほどまさに確認させていただいたように、より同じような事象が起こるかもしれないからという話でしょう。今度、水素爆発が現実的に3時54分に起こって、現実的に水素爆発の状況がわからない中で2Fはこの水素爆発に対する避難と、2Fのある種の同様のことが起こるかもしれない蓋然性が高まっているのではないかということの多分両方です。ただ、どちらのプライオリティが高かったかはわかりません。

○質問者 実はこの時間帯の2Fのプラントの状況を見ますと、特別大きな変異がなくて、なぜこの時期なのだろうねと。

○福山前副長官 ■■■水素爆発です。

○質問者 そうすると、逆に言うと、この18時25分に1Fから20kmに拡大してほとんど2Fからの10kmがそこに含まれてしまっている関係になるのです。

○福山前副長官 すごくよくわかります。その議論をしました。絵の描いてある地図はあります。若干はみ出るところが、これは8km、10kmでしょう。

○質問者 そうですね。10kmちょっとです。ここがはみ出るのです。

○福山前副長官 この広野町のはみ出るところが大問題になったのです。

○質問者 そのときではなくて後にですか。

○福山前副長官 後で大問題になるのです。この広野町の出っ張りをどうするかという議論が大問題になるのです。ここに実は高速道路のインターか何かがあるはずで、Jヴィレッジもこの辺にあるのではないですか。

○質問者 そうです。

○福山前副長官 つまり、そこが避難箇所するときには大問題に将来的にはなりません。しかし、私たちの場合には、先ほど申し上げたようにとにかく被曝させたくないという思いが一番なので。

○質問者 逆に言うと1Fの爆発が主たる理由でしょうから、我々もそうだろうとは思っていたのですけれども、今日お話を聞いていてほぼそういう線なのだろうと確信しているのですが、逆に1Fの方の20kmは先に出てしまっていたら、この2Fの10kmというのはなくてもよかったかもしれないですね。

○福山前副長官 かもしれません。それはもうわかりません。

○質問者 たらればの話ですからやってもしようがないのですが。

○福山前副長官 結果としては同じことですからね。

○質問者 はみ出た部分の問題が出ないで。

○福山前副長官 将来は出てきました。先行きには出てきました。

○質問者 出ないで済んだという話ですけれども。

○福山前副長官 でも、それは後の話です。

- 質問者 そうですね。わかりました。ありがとうございます。
- 質問者 それともう一つなのですが、今までヒアリングしている中で出てきた話として、2Fも20kmに拡大すべきなのではないかという議論が出たと一部聞いているのですけれども、2Fを20kmにという話が出た御記憶というのはございますか。
- 福山前副長官 余りないです。
- 質問者 それはないですか。
- 福山前副長官 はい。出たかもしれないですけども、余り私の中で優先順位が高くないので余り残っていないです。
- そろそろ3号機の爆発ですか。
- 質問者 お願いします。
- 福山先生、休憩はどのようにいたしましょうか。一旦。
- 質問者 今、ちょうど2時間ぐらいです。
- 福山前副長官 済みません、私がしゃべりすぎてごめんなさい。
- 質問者 いいえ、ありがとうございます。
- 質問者 御予定は大丈夫ですか。
- 福山前副長官 5時半まではちゃんと取っています。
- 質問者 今後残りは。
- 福山前副長官 6時ぐらいまでは大丈夫だと思います。延びる想定をしておりましたから。
- 質問者 では、休憩に。

(休憩)

- 質問者 そうしましたら、14日の3号機の爆発の辺りから東電の撤退ですとか、統合対策本部に至る部分の話をいただければと思います。
- 福山前副長官 14日の3号機は、多分夜中明けていろいろとトラブルっていたのです。ところが、余り記憶になくて、なぜかというところ13日になって私たちは水素爆発の状況と水を入れるという状況をつくって12日の夜に避難の記者会見をしているはずなのですけれども、明けて13日は8時39分に細野・吉田会談というのが書いてあるのです。
- 質問者 午後、午前ですか。
- 福山前副長官 当然午前中です。9時、電源につながらない、メルトダウンの可能性、水素爆発が9時になっています。3号機の水素爆発は何時でしたか。11時何分ですね。午前中ですよ。
- 質問者 午前中です。
- 福山前副長官 圧力容器減圧するとか、バッテリーが2時間ぐらいだとか結構書いているのですけれども、この辺でトラブルっているのは何となくノートには雰囲気があるのです。

○質問者 それは3月の。

○福山前副長官 勿論、13日の朝です。9時10分にバルブが開いて圧が下がったとか、注水したとか、いろいろ書いてあるのです。ということは、このぐらいには相当緊張感が走っているとは思いますが。

それで実はこれなのです。多分総理の部屋にいるときに秘書官がこのメモを入れるのです。これは私の字です。これは私の万年筆なのです。これは違う人ですから、水素爆発が起こったというメモが入って11時5分、吉田所長1回のみというのはよくわからないのですけれども、11時15分水素爆発でいろいろ圧の話を書き続けているのです。

○質問者 爆発後の話ですね。

○福山前副長官 これは爆発後の話だと思うのです。だから、これは報告が入っていますから、多分もう水素爆発の状況は、爆発が来てメモが入ってばっとその状況を聞いているということですから、12日の1号機の爆発よりかは若干すぐには連絡が来ているのだと思うのです。

○質問者 これは官房長官会見の最中ですね。

○福山前副長官 官房長官会見の最中ですか。

○質問者 最中に爆発が起きていたはずですか。

○福山前副長官 なるほど。では、私はひょっとしたら官房長官のところへ、何となく思い出しました。官房長官は結局このときには水素爆発に言及していないでしょう。

○質問者 その時間帯のときには。

○福山前副長官 してなくて、その直後にするでしょう。済みません、記憶はあいまいですけれども、もう一回しませんか。

○質問者 官房長官は11時40分に一旦格納容器が健全であるという発表をして、1時間後の12時40分に格納容器の健全性は裏付けられたと2回やっています。

○福山前副長官 2回やっていますね。だから、私が実は余り記憶ないのですが、ひょっとすると官房長官の会見と総理の執務室を行ったり来たりしているので、総理とちゃんと会話をしている記憶がないのかもしれないのですけれども、ただメモはこういうのが残っていたので。

○質問者 その際最中に、これは始まったのが10時56分なのですが、そこから15分経ったころ、ですから11時10分ぐらいに記者の方から福島第一の3号機の爆発が今あったと情報が入りましたけれども、事前に何かそういう予測があったのかという質問が入っています。

○福山前副長官 入っていますか。それに官房長官は何と答えていますか。

○質問者 「はい。私はこの会見場に来る前の段階で3号機の状況について改めて報告を求めてその情報を持ってまいりました。それに基づいて先ほど御報告いたしました。ただいまごらんのとおり、メモが入りましたが、11時5分現在、3号機から煙が出ているという可能性が」。

○福山前副長官 そのメモを入れているのは多分私なのでしょうね。

○質問者 「爆発の起こった、あるいは爆発のおそれがあるのではないかということで、事実関係を確認中でございます」。

○福山前副長官 ですね。それでもう一回やっているのですよね。

○質問者 次は、11時40分です。

○福山前副長官 そうですね。もう一回やっていますね。

○質問者 はい。「海水を炉心注入してきたところでございますが、先ほど11時1分、爆発が発生いたしました」というのが11時40分です。

○福山前副長官 私はそのときに多分上下行ったり来たりしていて、結果として官房長官の2回目の会見は多分お付き合いしていると思いますのでどういう状況かわからないのです。

○質問者 これは官房長官に行ったメモというわけではないですか。

○福山前副長官 そうかもしれません。わかりません。

○質問者 だれから回ってきたかもわかりませんか。

○福山前副長官 官房長官秘書官だと思います。このレベルで回ってくるとすると、官房長官秘書官で当時で言えば多分警察出身の中村さんか、経産出身の井上さんのどちらかからだと思います。正直言うと、私は実はこの3号機の爆発の前後の記憶は余りないのです。何かほかのことをやっていたのかもしれないのですけれども、実はもう一個変な話で言うと、もう1号機の爆発を経験しているので3号機が水素爆発だとわかった瞬間、ひょっとしたら抜けているかもしれません。そういう感じです。

ただ、結果として言うと、やはりここは残っていて自分でばつとメモを書いて、それも20 μ Svと書いてありますから、安否確認ができないということも書いてありますので、注水も含めると書いてありますから、相当それなりの危機感が多分あったと思いますが、そのときにやりとりは何をしていたかというのは実は余り記憶がないのです。多分会見場にいるからだと思います。

緊張感はあるのですけれども、

不思議なことで、だけれども、先ほど官房長官に会見に行きますかと聞いて行きますと言われて、総理がやらしてもらいたいのは完全に自分が当事者なのでそのときの映像というのはちゃんと残っているのですけれども、このときは実は余り残っていないのです。

○質問者 ちょっと前の日のメモのところに戻るのですが、13日の午前9時13分ごろにバルブが開いてというメモがある。

○福山前副長官 9時10分、バルブが開いた。

○質問者 その部分を見せていただいてもよろしいですか。

○福山前副長官 どうぞ。ここからです。細野・吉田会談でしょう。9時、電源つながらない、メルトダウンの可能性、水素爆発と。圧力容器減圧、バッテリー2時間、AM11時。でも、4m、3mは出ている、これは水だと思うのです。これは多分炉心の話だと思うのです。

○質問者 バルブの話が。

○福山前副長官 ここです。バルブです。

○質問者 バルブも開いた、圧が下がる。70gal、気圧。ありがとうございます。

○質問者 バルブが開いたという説明は。

○福山前副長官 あるのですね。これは説明がない限りは書けないですからね。

○質問者 このときにバルブが開いたのか、炉に穴が開いたのかというのは。

○福山前副長官 それは私たちはわかりません。

○質問者 バルブが開いたという説明があつて。

○福山前副長官 ただ、このときもまだ水は残っているという感じなのです。1m水、内と書いてあるのです。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 ちなみに全くメルトダウンという想定はこの時点では1号機も3号機もみんなないですから。

○質問者 13日はさすがにあるのではないですか。

○福山前副長官 いや、メルトダウンは13日もないです。メルトダウンしているかもしれないというのはある種中村さんの会見とかはありますが、でも、メルトダウンしているという確信的な認識はないです。

○質問者 それについてはまた。

○福山前副長官 また。どうぞ。

○質問者 その後、2号機の状況が悪化してくるというのが夕方くらいからありまして、まさに東電が職員を退避させる、させないという話が出てくるのですけれども、その辺りの流れ、御記憶の範囲。

○福山前副長官 実はもう2号機がかなり状況が悪くなったり、例の圧力が高くて水が入らないとかいろいろありますね。それぞれの号機でそれぞれ出てきたり、4号プールでも温度が上がったりしているはずなのですけれども、その状況は個別のそれぞれの号機の状況について、私は当時も素人なので、実は余りよくわかっていません。ただ、そのときに明快に説明をしてくれたのは安井さんです。安井さんが登場されてから、随分我々の中で雲が晴れました。それまでの説明ではない、ある種の合理的な説明と何がトラブルっているのかみたいなことについては、例の総理の隣の応接室で断続的に安井さんに説明をしてもらって、我々としては理解しているというのが13から14。

○質問者 安井さん自身は13日午後ぐらいから。

○福山前副長官 ですよ。それが実態です。

実は13日の夜は、私と枝野さんは夜中は基本的に計画停電の対応に追われます。勿論、原発の状況はそれぞれの炉の状況が不安定なのは理解していますが、付きっきりというわけではありません。計画停電がスタートするのは14日の朝の6時15分ぐらいから予定の第1弾だと思いますが、夜の13日の夜中の■1時ぐらいに東電の電力需給の担当の副社長と担当者を官邸に呼び付けます。他の政治家の方に今度聞いていただければと思いますが、少なくとも官房長官と私のレベルで言うと、計画停電の発表は唐突に発表されました。これだけ炉の状況でひっくり返し電源車の手配をし、水素爆発を起こしている状況にもかかわらず、あの計画停電の発表は私は一切知りません。恐らく枝野さんも知らなかったと思います。

発表されてから我々はどたばたしましたが、表で発表されてしまったものはしょうがないのでやらざるを得ないという状況の中で、13日の夕方ぐらいからトラブルが起こり得るかもしれないということが厚労省から入ってきます。これは狭心症の方が自力のバッテリーで、充電型のバッテリーで在宅のケアをしている。この人が東電の計画停電をやるという所管内に少なからずいる。人数はよくわからなかったのですけれども、状況によっては1,000人ぐらいだと言われていました。

これが停電が起こると、本人は知らないで充電バッテリーが切れると命に関わるという話が夕方ぐらいから厚労省から入ってきて、厚労省としては何とかしたいと、ケアセンターを通じて何とかしたいけれども、ケアセンターが土日の日曜日でやっていない。何とか徹夜して連絡を取りたいと思うけれども、全員は不可能だという話が入ってきて、済みません、枝野さんにはあったかどうかわかりませんが、私の心の中には、この状況で勝手に計画停電など発表しやがってというのは実はあって、これはどうしようと思って何とか計画停電をずらせないかということを経野さんと相談しました。厚労省側からは、朝の6時15分から始まる計画停電が午前中だけ時間をいただければ何とか午前中、ケアマネジャーのところへ走り回らせて狭心症の人の在宅ケアのところに走り込むからという答えを厚労省がくれていたので、11時に官房長官の部屋に担当副社長を呼んで、何とかできないかということ強く求めました。

当然、当時は電力の需要が低下をしていますし、JR 東日本等も間引いて運転だとかということをやってくれているので、本当にあんたたちの需給環境は大丈夫なのかと言ったら、もういっぱい計画停電しないと無理ですと言うから、そんなこと言っても2日前から電力需給は落ちているだろうと、なおかつ大口の顧客がいるはずだと、その大口の顧客に何とか協力をしてもらって何割か間引いて電力の使用を節減するような状況を説得してくれと言ったら、彼らは電力需給の表も持たず、ただ単に手ぶらで来て、挙句の果てには私のその言葉に、大口の顧客はお客様ですから、電力使用量を減らしてくれなどとは我々からは言えませんと言ったもので、今度は枝野さんが切れて、もし本当に人が亡くなったら東電は殺人罪だと、未必の故意だと、私は1人でも死んだら私の名で告発すると枝野さんがどなって、そこに私が、ではとにかく3時まで大口の顧客も含めて交渉してこいと、

本当に電力需給がぎりぎりなのかどうかをちゃんと数字を持ってこいと言って、3時に帰ってきてくれと言って、1時に来られた2人を3時に帰しますという話になって、実はこの夜中は私と枝野さんはそこにかかりっきりでした。

3時に副社長が帰ってきたら、それぞれの大口に連絡をしましたとか、どこどこに協力をしていただいて精査をしたところ、計画停電は半日は実施しないで何とかなりそうですと[]言っていて、わかったと、ただし、1回発表したものをやらないという今度政府の信頼性に欠けるので、需給関係を考慮した上で実施をしない地域もありますという会見を6時15分の手前に無理矢理やりましょうと言って官房長官に6時15分の前だったと思いますから、明け方の5時半か5時45分だったと思いますが、官房長官に計画停電を実施するけれども、状況によってはしない場所もありますと、変に狭心症のことも言いませんでした。病院が危ないということも言いませんでした。そういう形で実施はせざるを得ないけれども、しないところもあり得ますという形で6時15分から実施するはずの計画停電を実施しないで、なんとその日の夕方までもったのです。

それで昼ぐらいになったら、厚労省が大体全部に連絡が付きましてと言って来てくれて、これで命には関わらないなということになって、計画停電についてはそこから先はほぼルーティンで動くのですが、それで混乱したのは、政府は結局やると言ったのをやらないと言って、無理やり電力使わなかったところに迷惑をかけたのどうのこうのと、これも大変だったのですが、裏では実はそういうことをやっていて、13日の明け方にかけては私と枝野さんはそちらにかかりっきりでした。

だから、質問事項にあった、枝野官房長官の14日の朝の会見で3号機の問題について言及がなかったのはなぜですかという、当然なのです。我々から言うとそのときには、まず計画停電の問題についてのみきちっと伝えようという趣旨だったので、3号炉の状況について明け方の会見で言うのは逆に言うと焦点がぼけるという判断で言わなかったんだと思いますので、そこは明快な理由はあると思います。

これが実際余り報道にはなっていません。一部なっていますが、こんな詳細にはなっていなくて、これは本当に枝野さんと私と東電側の電力需給対策の副社長と担当者と枝野さんの秘書官とうちの秘書官だけでやっていたので、総理にはほとんど事後報告でした。だから、実は3号炉の状況について私の中で余り頭に残っていないのは、13日はほとんどここにかかっていたからです。

14日が始まりますね。14日が始まると、基本的にはそれぞれの状況が先ほど申し上げたように不安定な状況になります。断続的に総理の横の応接室に入って確認をするのですが、余り芳しい状況ではないと。夕方になって安井さんのところで話をしたときに、それぞれの炉の状況について話があったのですが、ごめんなさい、1号機はこうだ、2号機は水がどうのこうの、簡単に言うと圧力が上がっていて、水を入れるにも水が入らないから、圧力を下げるために開けたいのだけれども、それが開かないとか、手動で開けるとか、3号機こうでとか、4号機はこうでということをや全部個別にやってもらうのですけれども、

済みませんが自分の記憶に残っている発言は、安井さんとか保安院の人に向かって、安井さんとあと班目委員長かな、東電の人もいたかもしれませんが、こんなアクロバットなオペレーションは持続可能なのですかと聞いたのは覚えています。

それを官房長官も経産大臣も当時は細野補佐官も含めて聞かれていて、大変なオペレーションが同時並行で行われていることは、私らなりに感じていました。ただ、そのときには、もう既に1号機と3号機は爆発しているわけですから、とにかくこれ以上悪くなるのを回避するために作業は頑張ってくれと。東芝とか来出したのはそろそろですか。

○質問者 東芝は13日ぐらいから。

○福山前副長官 だから、13～14日にかけて、そろそろ東芝とか来出すのですけれども、東芝ともう一つ、日立の方が社長とかが来られて、東芝の社長と日立の社長と安井さんが来られて随分炉の状況についての見通しというか全体像が見えてきたというのが実態です。東芝の社長と日立の社長が来られたときは、私は安井さんとともに総理の執務室で最初のレクか何かには入りました。なるほど、こういうことなのかと。Jヴィレッジに何らかの形の機材を集めてくれみたいな指示を昼間ですけれども、一生懸命出した記憶があります。

だから、そのころはそういう状況で1日ばたばた計画停電はどうなっているみたいな話で走り回っていて、夕方になって応接室に行くと、それぞれの炉が不安定さが増して、オペレーションがより難しくなっていますみたいな話が出てきていたというのが大体14日の夕方の状況です。

夕方から若干夜にかけてですけれども、ふだんいなかった松永事務次官とかがうろうろし出していて、なぜ松永さんとか来ているのだと私は思い出しました。正直申し上げると、松永次官も資源エネ庁も当時の細野長官も、全くこの前半戦の2日、3日は官邸に顔を出しませんでした。なぜこの人たちは顔を出さないのだろうと私などは思っていたのですけれども、現実問題としてうろうろし出していて、あちこちで言われていますが、私には東電からの電話はありませんでした。官房長官には一度か二度か、海江田大臣には間違いなく二度、細野さんは電話があったけれども、細野さんは自分は聞く立場ではないと言って電話に出られなかったというのを細野さんから私は聞きました。

私はだれから聞いたか覚えていないのですけれども、枝野官房長官か寺田さんから東電が撤退と言ってきているんだよという話を聞いて、撤退とは何ですかという会話を寺田さんか枝野さんから聞きました。細野さんには、おいおい、こんなの言ってきているらしいよと私の方から持ちかけたら、細野大臣が当時補佐官ですけれども、私に、私のところにも電話があったのですけれども、私はそんなの聞く立場ではないからと言って断りましたよと、そのときに言われました。撤退とは何だろうねみたいなことをごそごと枝野さんや細野さんとしゃべっていたというのが私の夕方から夜の状況です。

ところが、大体12時超えて夜中の12時から1時、2時ぐらいになると、その状況が非常に緊迫度を増してきます。それは安井さんの話も含めて、松永さんがうろうろする話も含めて、官邸内というか総理の執務室周辺がざわざわし出してきて、結果として12時過

ぎくらいからだったと思いますが、これは時間はあいまいなのですけれども、延々と断続的に議論します。2時ぐらいにぐちゃぐちゃ汚くなっていたのを片付けたのは後ですね。

1時とか2時くらいから、実は総理を抜いて官房長官、海江田大臣、班目さんや安井さん、伊藤さんも含めて炉の状況について再度の説明があって、撤退と言ってきているけれども、どうしようみたいな話を総理を入れないでしました。

○質問者 場所が。

○福山前副長官 応接室。

総理を入れないでして、基本的には安井さんとかが説明をしてくれていて、細野当時補佐官が吉田さんと電話で話したりされているのはそのころかもしれません。電話でやれることはあるかみたいなことを安井さんも言うておられて、結果としてそれが3時前まで続きました。何となく撤退やむなしだなという空気が流れるのを私なりには相当抵抗感があって、撤退はどうなるのだろうというのがあって、伊藤危機管理監が朝日新聞の「プロメテウスの罫」で、東電の担当者と撤退をしたらどうなるんだというときに1号もだめですとあって、

○質問者 その間、ずっと東電関係者もその会合にいたという。

○福山前副長官 います。

○質問者 それは武黒さん。

○福山前副長官 武黒さんではなくて、■■■■さんかもしれません。ところが、私たちも武黒さんとか■■■■さんは正直言ってわからないのです。私が官房長官とか大臣にやはりこれは重要ですから総理の判断を仰いだ方がいいのではないのでしょうかと言って、そうだねという空気になって総理の判断を仰ぐことになりました。そのときに総理の判断を仰ぐのに、松本防災大臣がいらっしやらなかったんで、松本防災大臣を宿舎まで呼びに行こうと言って電話連絡を松本防災大臣の秘書官に連絡を取りました。松本防災大臣は官邸の裏側の入り口がわからなかったんで、では赤坂の宿舎まで迎えに行きますと言って行ったのがうちの秘書なので、間違いありません。

総理を呼ぶ御前会議の前に松本大臣にいていただいた方がいいねということで呼びました。一方で、藤井副長官と瀧野副長官もいてもらった方がいいということで呼びました。実はなぜ藤井副長官をその場で呼んだり瀧野さんと呼んだり松本さんと呼んだかという、それなりに重たい意思決定だという意識がその場にいたみんなにあったので、自分だけの判断ではよくないということで結果として藤井さん、松本大臣、瀧野副長官を呼んでやることになりました。

現実には総理は執務室で休んでいただいていたので呼ぼうということで総理を呼んでもらって、総理の執務室に、これは多分海江田、枝野、寺田、福山、細野、政治家だけだと思います。伊藤さんがいたかどうかの記憶は実は定かではありません。現実にはその場で総理に私の記憶では枝野さんか海江田さんが東電が撤退と言っているというようなことを伝えたと思います。撤退なんてあり得ないだろうというようなたぐいのことを総理が言

われて、撤退などしたら1号、2号、3号、どうするんだと、燃料プールまであるぞと、あれを放っておいたらどうなるんだみたいな話をされて、それはだめだという話をされて、ほぼ全体のコンセンサスができ上がる中で隣の応接に移動したと私は思っています。

その隣の応接室に移動したら、安井さんや班目さんや武黒さんだか■■■さんかは余り覚えていないのですけれども、その人たちがいて、松本大臣だけ遅れて来るのですけれども、副長官とか瀧野さんとかも入った中でどういう状況だと言って、もう一度安井さんからそのことに対する、1、2、3、4に対する説明があります。これが世に言われる御前会議です。だから、その場にいた官僚の皆さんが御前会議だと思っている前に実は政治が一定の意思決定をしています。ただ、世の中に出ている御前会議は、その役人の皆さんが出ているみんながいた御前会議のことを言っていて、そこはいろんな報道その他が混然として混乱している状況はあると思います。

総理は安井さんとかからその状況を聞いて、撤退などあり得ないと、細野さんに、「細野君、東電側に行ってもらえないか」みたいな話が出て、それで清水社長を呼べという話になります。それは法的に行けるかどうかみたいな話を総理は秘書官の山崎さんと経産省秘書官の貞森さんに聞いて、原災法上は何でもできますから大丈夫ですみたいな話になって、ではちょっと清水社長を呼べということになって清水社長が来られるのが4時15分くらいだったかな。

○質問者 そのくらいですね。

○福山前副長官 これが大体の顛末です。そのときに一時退避だとか、まず少なくとも退避という言葉はよくわかりません。作業を一部だけ退避しますみたいな話というのは、全く私の頭の中には今の状況では記憶がありません。清水社長が来られるときに、このまま総理は撤退を言わない。総理は清水社長が来られる前に、政治家だけを執務室で集めている話をしていたときに、東電で演説をしたことのベースみたいなことを言われたのです。それは要は1、2、3、4号まで全部ほったらかしたら東北だけではない、福島だけではない、東日本全体がだめになるとか、60歳以上の人間はみんなで決死隊で行けばいいんだ、状況によっては私ももう子どもをつくる心配もないから、陣頭指揮しなければしょうがないかなみたいな話をされたりとか、当時、若い寺田さんとか細野さんに向かって、君たちはまだ先があるからだめだ、それは行けないよみたいな話をされたり、このまま放っておいたら外国が日本に来て原発を処理したら日本は占領されるぞみたいな話をしたり、こんなのはだめだと、何としても撤退などあり得ないと、日本がおかしくなるということ、全然これは感情的ではなく淡々と私たちに話をされて、巷間言われている東電での演説を聞いたときに、あのと時の話をもう一回されているなという印象を持っていました。

清水社長が入って来られると言われて、寺田補佐官が迎えに行かれました。私は寺田補佐官に、おいおいと言って、総理は撤退する気ないから、清水さんが撤退とか言ったら大変なことになると寺田さんに言ったら、寺田さんが、では、私は迎えに行きますから、清水さんに伝えておきますよと言って迎えに行かれました。東電側は3人で来られたとい

うことは秘書官からその場で聞いていたので3人で入って来るかなと思ったら、そのときすごい印象に残っているのですけれども、清水さんは寺田さんと1人で入って来られました。1人だと思って、応接の構図は皆さん御案内だと思いますが、私が総理だとしたらこちらの席に清水さんが恐縮しながら座られて、総理は大変御苦勞いただいている中済みませんがとか、御足勞いただいてとか、お越しいただいて済みませんか何かすつと言われて、全然どなっていません。撤退などあり得ませんから一言ぽつと言われてたら、清水さんが「はい、わかりました」と言われて、あんなに撤退と言っていたのになぜこんなあっさり引き下がるのという感じを実はみんな持ったというのが後でみんなの印象を聞いたら思ったということで、実は私もそういう感じを受けました。

私はみんなとちょっと違うのは、さては寺田さん、本当に清水さんに事前に伝えたなと思って、そう実は心の中では思っていました。その後、総理が清水さんに細野君を東電に行ってもらって現地で政府と東電の統合対策室をつくるから、机と部屋を用意してくれと言いました。そのときは清水さんはさすがにちょっとえっとびっくりしたような顔をされて、更に今から行くから準備しておいてくれと言われて、本当に驚いたような顔をされていたのですが、一方でこれは記憶があいまいですけれども、どのぐらいで準備できるかと総理が聞かれたら、これは時間で言われたのか、6時と言われたのか、2時間かかると言われたのか覚えていないのですけれども、聞いた瞬間に総理がそんな時間がかかってしまったらだめだ、もっと早くと言って、30分後か何かに行くからと言って、ではまず細野君を連れて行ってくださいと言って、細野さんと清水さんが出られます。だから、清水さんがいた時間は動静的に言うと10分とか15分ではないですか。すぐだったと思います。

東電に指定をした時間に向かって、海江田さんや総理や私や寺田さんが東電に乗り込むというのが5時半ぐらいだと思います。東電に入ってびっくりしたのは、オペレーションルームが150人か200人ですか、テレビ会議のシステムがあって、こんな大人数でこんな大オペレーションをしているのかというのが入って第一印象でびっくりしました。

こんなことをやってちゃんと現地と連絡が取れているんじゃないと思ったのが私の正直な印象で、一方で、そのときの東電の空気が余りにもぬるいのでびっくりしました。撤退だと言ってきて、いつ爆発するかわからないと思っているのに、ここの空気は緩いぞと思って、私は何度もどまりました。それは怒ってどなったのではなくて、皆さん、済みません、お邪魔しますが、皆さんは皆さんの仕事を続けてくださいと、気にしないで続けてください、皆さんは皆さんの仕事を続けてください、どうぞ自分の持ち場にお戻りください、よろしく願いますというのを私はどなりながら部屋に入ったのを覚えています。

総理がオペレーションルームで演説という話を勝俣会長から紹介されたのか、清水さんからか忘れましたが、紹介されて総理が演説をしたのが巷間言われている演説です。これはさすがに政治家ですから何百人の前だったので若干力が入った話になりましたが、決してどなっていたわけではありません。言葉的にはこのままで行くと東電もつぶれるぞとか言われましたけれども、別に私は聞いていてこの危機下の状況だからさうだろうなという

ようなことを言われて、実はそのオペレーションルームの小部屋にあいさつの後、誘導されました。

そこで清水さん、勝俣さん、恐らく西澤さん、小森さん。武藤さんは現場にいるからその場にはいないかもしれませんが。要は[]皆さん役員の方々が相手側に座って、こちらは総理や海江田大臣、細野さん、私はずっと座って状況について聞きました。実はその小さい会議室も福島と刈羽崎か何かがつながっていて、現地で吉田さんとやりとりしている状況を画面で見ている、そのときに実は当時は爆発音がして、緊急退避させますと言って吉田所長からの了解のアナウンスが来て、当時はサプレッションチェンバー辺りで爆発だ、その辺の音だという話をざわざわと映像で見ながら私たちは、えっ爆発したのみたいな話の中でその様子を見ていたというのが大体6時前後だと思います。

その後、水を入れるだ、注水だみたいな話をしながらここにいつまでもいてもしようがないねということになってオペレーションの邪魔にもなるので一応戻りますと言って総理と私と寺田さんは戻って細野さんは残ったのではないかな。それが大体統合対策室をつくったときの流れです。ちょっと長くなりました。

○質問者 ここで3点ほどございまして、1つが、当時恐らく[]部長であろう方が14日ぐらいから官邸にいらっしゃったと。当時、こういう浮足立ったような状況で東電の職員がいたら、どうなっているんだと非常に強く詰問されて強く印象に残るような感じで思っておるのですけれども、東電の方に対して、例えばだれかが強い調子で状況を確認するとか、そういったやりとり。

○福山前副長官 状況を確認するというのはどの場面ですか。

○質問者 撤退、退避という話が出てきたぐらいです。

○福山前副長官 状況は先ほど申し上げたように、ずっと14日の夕方ぐらいから安井さんを通じてやっているのです。失礼ながら、[]さんとか当初の寺坂院長とかは私のメモリースイッチからは本当に失礼な話なのですけれども、[]消えているんです。だから、だれかわからないのですけれども、ただ、当時から言うと、安井さんの説明がやはりクリアーなのです。だから、常に安井さんの話を聞きながら、東電にどうなのみたいな話があります。途中で強めの詰問みたいなものはそんなに強かったと思えないです。どちらかというとなんとかしてほしいという感じですね。

○質問者 14日は東電の人間はいましたか。

○福山前副長官 だから、[]さんだと推測するのです。

○質問者 いたとすれば、そういう話ですから安井さん経由であってもそのときにどんな答えをしていたのか。

○福山前副長官 そのころはほとんど東電の人は発言しないです。特に[]さんなどは余計そうです。

○質問者 余り期待していないですか。

○福山前副長官 もう期待していないし、聞いてもない。だから、安井さんが来て私たちは何と物のわかった人が来たのだらうと思ったのですから、みんな当時は安井さんに聞いたのです。どうぞ。

○質問者 済みません、その後、御前会議という形で総理に退避、撤退の話があるということをお伝えされるのですけれども、その際のプレゼンの仕方というのは、一部の話で、今は撤退は許さないということで、菅総理以外のそこにいる人間は意思が固まっているのだけれども、こういったタイミングであれば撤退ができますかというような聞き方をしたと言っている方もいらっしゃるのです。

それとは別に東電が撤退と言っていますが、それは許されますかというような聞き方をしたというような話も一部であるのです。

○福山前副長官 許されますか。

○質問者 東電が撤退したいと言っているということをお単純に報告したという方と、今後、事態が悪化したときにどのぐらい事態が悪化すれば撤退やむなしかということについて総理に相談に行ったと言っている方も一部いらっしゃいます。

○福山前副長官 それは御前会議ですか。

○質問者 具体的にどのオケージョンかということもまだきちっと特定できていないのですが、恐らく政治家だけで最初に入られて、少人数である程度の意思決定をされたときかと思えます。

○福山前副長官 したけれども、それだけではというので御前会議でいろんな状況を聞いたのです。

○質問者 そのときというのは、どこまでだったら、どういう状況に至れば撤退しなければいけないのかというような話だったのか、東電が今撤退と言ってきているが、これについてどう対処すべきか。

○福山前副長官 後者です。

○質問者 では、具体的には官房長官が総理に対してもう既に東電に対して撤退は許しませんという意思表示はしてありますが、今後どれぐらい状況が悪化すれば退避やむなしと政府として判断しなければいけないでしょうかという相談の仕方をしたとおっしゃっている方がいるのです。

○福山前副長官 当時官房長官は撤退はだめだと電話で言っているはずですが、だから、今のところ撤退をしないで作業を続けてくれと言っているけれども、東電側が撤退をしたいと言っているときに、作業員の方の危険がありますから、そのことも含めて要はどのような状況になれば撤退はしようがないですかという聞き方をした可能性はあります。

ただ、私の心の中には、もう 10km 圏内の避難はしていますね。そうすると、命の危険があるのは作業員だけなのです。当時の作業されている方ばかりなのです。問題は那些人たちの命の危険をさらすところをどこまでリスクをぎりぎりまで引っ張れるのかという判断なのです。つまり、わかりやすく言うと、済みません、当時本当にメルトダウンしてい

ると思っていないので、メルトダウンなり爆発なりのリスクはまだ高いと思っているわけです。その状況で 10km はもう避難ができているということは、作業している人が危ないと。その人たちの危険と全体のオペレーションがどういうふうになっていくのかということのぎりぎりのラインまではどこまで引っ張れるのだろうかというのはそれぞれありました。

だから、心の中には一般の住民に関してはもう避難させているんだというのはどこかにはあるわけです。その中でぎりぎりの判断です。先ほど私が申し上げた撤退もやむを得ないかもしれないという雰囲気は若干あるというのはそういうことです。みんな強く意思を持って撤退なんかあり得ないと言っているわけではないのです。だって、作業している人の何百人の命がかかっているのはわかっている。しかし、放っておいたらメルトダウンや爆発が起こったら、10km どころではなくなるというのもわかっている。その中でどう判断するんだという中でみんなどうしようという話をしていたので、今、聞かれたような表現の仕方を官房長官がしていたことはないとは言えないと思います。いろんな雰囲気がみんな揺れましたから。それは総理の判断を仰ごうという話になった。

私は実は御前会議の記憶というのは余りない。なぜかという、実は総理が撤退などあり得ないということ私たちに伝えて応接室に行くときに、これも本当に情緒的なのですが、私の中でははっきり覚えているのですが、総理は撤退させる気はないのだと、一方で作業している方は危ないなと思いつつ、私の中では作業はまだ続くんだと思ったのです。だから、若干その 1 号機、2 号機、3 号機のやりとりはがーがー説明させているのですけれども、撤退はないという結論だけは私の中に応接室の中で入っているので、私の中では実はちょっと作業はまだ続くんだと思っている分だけ緩いのです。総理の政治家同士の応接室よりも私の気分は若干緩くなっているというのは実際ありました。緩いというのは、緊迫感はあるのですが、ただ、撤退をさせるということはもうないんだということに対して言えば、若干気持ち的には撤退はない、作業は続くんだとは思っていたという感じです。

○質問者 これは 1 点確認なのですが、統合本部を置くという考え方は政治家だけの少数の方で出てきたのか。

○福山前副長官 応接だと思えます。総理が言った。

○質問者 では、少数ではできてなかったのですか。

○福山前副長官 少数では出てきてなかったかもしれないです。そこははっきり覚えていません。わかりません。

○質問者 わかりました。

○質問者 この統合本部に行かれてまた官邸に戻ってきた辺りだと思うのですが、この日の 11 時に 20 から 30 の屋内退避の指示というのが出ているのですが、この検討過程というのはどういうふうになっていますか。

○福山前副長官 完全にサプレッションチェンバーが爆発したことで、4 号プールで煙が

上がっていませんか。

○質問者 はい。火災のような煙が上がったというものです。

○福山前副長官 4号プールの煙は私たちは東電で見ているのです。それで、先ほどから何度も申し上げているように、この時点ではまだ爆発のリスクはなくなっているとは思っていないのです。メルトダウンしているとは思っていないのです。ですから、逆にどんどんリスクが高まっている状況はわかりますね。だって、撤退するの、いつどこで東電が手を引くかわからない状態で、片方でサブプレッションチェンバーが当時で言えば爆発したと思っっているし、4号プールは煙が上がっていると。とにかく早く逃がさなければいけないけれども、今度はより爆発のリスクが高いと思うから、外へ出ると次は20~30ですね。ここにその当時のものがあるのですけれども、20~30ですと移動人数、人口がやたら増えると書いてあります。これは30km圏内だと14万になるのです。14万になるということは、これは多分伊藤さんが御示唆をいただいたのでしょけれども、20~30kmを、より同心円が広がって人数が多くなると、当時で言うと20kmまでは行っていますね。20まで行ってここの同心が広がるとより人口が広がるのです。

結果とすると、ここの人口を逃がすのに何日ぐらいかかるかという議論をしたら、多分伊藤さんはそのとき4~5日かかると言ったのです。このときははっきり覚えていますけれども、子ども、妊婦、お年寄り、それも入院しているお年寄り、ここから逃がさなければいけない。そのまずバスとか車の手配が要る。これはもう逆に言うとリスクを背負っているから自衛隊とか警察にお願いしなければいけない。そこから出して自分たちで逃げる人は逃げてもらうと。だけれども、結果として全員避難させるのにどのぐらいかかりますかと言ったら、多分早くて4~5日と言われたと思うのです。避難をしているオペレーションの最中に何らかの爆発や何らかの放射性物質がたくさん飛散するような状況になるけれども、そのときに避難をしてもらう方がいいのか、屋内退避で家の中にいてもらった方がいいのかという議論を散々しました。

結果として、外へ出てもらうと意に反してそのときに爆発とか何かが起こったら被曝する。屋内退避の方が被曝しないと。ましてや20~30は距離が長いからそこまでは飛ばないみたいな話を班目さんとか相変わらずするのです。私の記憶で言うと、班目さんからチェルノブイリは今でも25kmが立ち入り禁止内ですからみたいなことを言うのです。

それで結果として言うと、この炉の不安定な状況の中でいつ爆発するかわからないのだったら屋内退避にしようという判断をしたのだと記憶しています。ただ、当然これは自主避難できる人は自主避難してくださいというあれだったと思います。枝野さんの会見でも恐らく自分で逃げられる人は逃げてくださいと言っているはずですよ。

○質問者 もし御存じだったらなのですが、屋内退避になったのですけれども、屋内退避は基本的には長期間行うことは想定されないオペレーションであると防災指針の方にも書いてあるということで、当初、屋内退避、この3月15日にセットしたときには、これを長期間また4月になるまで続けるというような想定はしていないということですか。

○福山前副長官 想定はしていません。しかし、短くなるかどうかはわかりません。つまり、このときの判断は短いとか長いとか、申し訳ないですけども、防災マニュアルとかほとんど関係ありません。極端な話で言うと、15日ですから、本当にサブプレッションチェンバーが爆発したり東電が撤退したり4号プールから煙が上がったりしている状況ですから、そのことに対する被曝を回避するために屋内退避なので、そのときに短いのが想定されているというのは、1個気になるのは、原子力防災マニュアルに書いてある防災の指針の話は、チェルノブイリ型のぼんと爆発した一過性の爆発を前提にしているのです。つまり、その1か所ぼんと飛んでプルームが飛んであるところに行きますからというのが全体なのです。この状況は1、2、3、4がいつどこで何が起こるか分からない状況ですから、私たちは常に2つのリスクを抱えていました。1つは爆発のリスク。もう一つは、飛んでいる放射性物質による被曝のリスクなのです。

実はこの話は私も正直申し上げると後付けです。当時はまさに外へ出したら何かあったら被曝するのではないかというのが主たるあれだったので、現実の問題として言うと、屋内退避の判断をしました。屋内退避が結果として計画的避難も含めて長くなったことは、避難をされた方にとって本当に御迷惑をおかけしたと思っておりますが、一方で、それぐらい私たちは爆発とかメルトダウンのリスクを引っ張るぐらい引っ張った状態です。だって、東電がメルトダウンを認めたのは5月でしたか。日米協議が始まったのは3月20日以降ですけども、3月20日以降でアメリカがメルトダウンしているはずだとさんざん意見の違いを言ったにもかかわらず、東電はまだメルトダウンしていないということをずっと言い続けています。つまり、その間じゅうは私たちは何かあったときに外での被曝を恐れるということをしつとっていたのです。だから、いたずらに長く屋内退避を引っ張っていたのではないのです。炉の状況が安定をしてもう爆発やメルトダウンのリスクが無くなるまでは外へ出せないという中で実は屋内退避が結果として長引いたというのが実態です。これは後々で出てくるSPEEDIの議論に全部つながります。

○質問者 避難だけ先に残りを聞かせていただきたいのですけれども、3月23日に安全委員会がSPEEDIの試算結果を出してきて、これはいわゆる小児甲状腺透過線量で計ってきているのですけれども、100mSvにも達する地域が飯舘村や川俣村の方向に向かって伸びていると。これは避難範囲を変えた方がいいのではないかとということで安全委員会が官邸に持ってきたということがあったのですけれども、これに関する御記憶等がありますか。

○福山前副長官 これは明快です。これは逆に言うと、久木田さんではなくて女の人。

○質問者 久住委員。

○福山前副長官 久住先生と班目委員長が青くなって、初めてSPEEDIで出ましたと持ってきました。何なんだこれはみたいな話なのですけれども、SPEEDIは私はもっと前から知っています。それは後でちゃんとお話をしますが、結果としてすぐに逃がせみたいなことを久住さんが言い出します。これは一体何か所のモニタリングの結果なんだといったら、実はたった4か所です。それも初めて出てきたSPEEDIの結果です。現実問題としては今、

屋内退避の状況をやっている最中です。その中で久住さんがヨウ素剤を投与した方がいいのではないかという議論をしました。そうしたら、これも後でゆっくり話しますが横にいた小佐古さんが何馬鹿なことを言っているのだと、ヨウ素剤はブルームが飛んできて何時間後に飲まなければ意味がなくて、もうブルームが飛んでから14~15日だと。もう23日の段階でヨウ素剤を飲んでもとっくのとうに遅いのだ、そんな意味のないことをするなみたいなことを総理やみんなの前で言い出します。

最初、久住先生の前で避難をさせろと言っていた班目委員長がだんだん声のトーンが小さくなります。本当にこれは危ないのかと、もう実はブルームは飛んで行っているのではないかと、では、逆に言うと外へ出したら余計被曝するのではないのと、屋内退避なのだから屋内退避のままの方がいいのではないのかと、本当にこのたった4か所のダストサンプリングで合理的な説明ができるのかという話をすると、どんどん久住先生も班目委員長も声が小さくなってきます。小佐古先生の声が大きくなって、お互いがけんかをし出します。[REDACTED] それで総理がもういいと、そちらはそちらで専門家やってくれという話になって、実はそんな状況で、悪いですけども、合理的な意思決定ができないという話の中で、もう専門家同士で1回整理してくれとあって、それも私が引き受けますと言って、私が専門家同士の議論を文科省や保安院も含めて入れるということで2回それからやりました。これが実態の話です。

これは後々SPEEDIの問題にも関わってくるのでこのぐらいでやめますけれども、そのときの意思決定の流れはそういう流れです。

○質問者 もしそのとき話が出た内容で覚えていらっしゃったらですけども、当時、こういう絵が出されていて、100mSvに達するんだということで説明されたみたいなのですが、なので避難させた方がいいのだと久住先生が言って、それに対して一方で100mSvから500mSvは屋内退避の基準とされていて、500を超えたときに避難を検討するということが指標として定まっているので。

○福山前副長官 それはIC^{IP}でしょう。

○質問者 はい。なので、仮に100だとしたところで外に出る避難をする必要がないのでしょうかという話が当時出て。

○福山前副長官 それは小佐古さんから出ているのではないですか。

○質問者 久住さんは黙ってしまったという話があったのですが。

○福山前副長官 だから、もう先ほど言ったとおりです。

○質問者 そういう流れだったということですか。

○福山前副長官 はい。だけれども、どちらがいいのかわからないのです。ただ、私たちが思ったのは、外へ出して避難させるということは、その線量の高い状況で外へ出すということでしょう。今、屋内退避にいるのにわざわざ外へ出して被曝させるのかという話と、本当に早く外へ出さなければいけないという話がこの3人の専門家の話では意思決定できるような材料がないのです。ましてやSPEEDIはこのときのダストサンプリングの量とい

うのは4か所ですから、初めて SPEEDI を持ってきて大騒ぎになったわけです。後で話しますけれども、本当に小佐古さんも班目さんも SPEEDI に関しては [] いきなり持ってきていきなり逃がせとかこの人たちは何を言っているのかという話なのです。お互いが学者同士で文句を言い合ってお互いの見解の違いでさもお互いが [] だなみたいな話をして、もう総理がわかった、もう学者同士でやってくれみたいな話になって、結果としてそこは屋内退避のまま維持したというのが私の記憶です。

○質問者 あと数点なのですけれども、その後、3月31日以降、官房長官室でいわゆる計画的避難区域と緊急時避難準備区域の検討をして、これは福山副長官にも中心になって入っておられたと聞いておりまして、この計画的避難区域と緊急時避難準備区域については、初期の3月11～15日までの避難の決定と比べると、割といろいろ政務から指示を受けて事務方が作業してきたものに基づいて検討していたと聞いているのですけれども、まず新たな避難の考え方というのをこの時期にスタートさせた何か契機になるようなものというのはいったいどのようなものでしょうか。

○福山前副長官 それは SPEEDI が3月23日と3月下旬から4月初めに空間線量のモニタリングの結果、アメリカから空間線量マップみたいなものが出てきていましたし、IAEA が3月の終わりに飯舘に入って1回もめ事を起こしていると思いますが、その話とか出てきましたし、一方でようやく3月の23、24日ぐらいからキリンの投入を始めとして、例のコンクリートポンプ車による注水がある種一定できるようになるわけです。現実に日米協議が3月21か22日から始まるのですけれども、私が正式に出したのが事前協議も含めて20日ぐらいからだと思いますが、日米協議の中でそれぞれの炉の状況について、関係する全省庁と日米の専門家と東電の間で毎日議論があります。その中でどの程度メルトダウンしているかしていないかの見解の相違はあるにしても、注水作業すれば一定の安定が保たれるという状況の中で、一定の炉がこうやって安定状況中で爆発や放射性物質の大量の飛散という状況がなければ、やっとならから出せるねと、出せるねという言葉は失礼ですけれども、避難していただけるねという状況の中で23、24日ぐらいから具体的にモニタリングの結果がやっとならから出てきた SPEEDI の状況などを基に避難のオペレーションをどうするか議論を始めたというのが実態です。

先ほど官房長官室と言われましたが、これは別に私がと申し上げるつもりはありませんが、事前の仕込みは [] 副長官室でやりました。それから中間検証にほとんど言及がない話で言うと、原子力生活被災者支援チームの話がほとんどありません。原子力生活被災者支援チームは、3月の終わりにできてから毎日やりました。毎日やってここにはほとんどすべての省庁が来ました。ここで大体、計画的避難区域、緊急時避難区域、後々による干渉地点、干渉区域、食品の暫定規制値の問題、汚泥の処理の問題、放射性廃棄物の問題等については全部事前の仕込みはこの生活支援チームのほぼ副長官副大臣会合、そこには全部役所の局長クラスが来ていましたけれども、私の部屋で仕込みをしました。これがほぼ3月の終わりから毎日やっていて、ここの仕込みの中で長官に意思決定を上げた。た

だ、枝野官房長官と私はなるべく同じ情報を共有しようということを確認して合っていたので、私のところでやる報告を私が官房長官の部屋へ行って一遍に終わらせることも何回もありました。しかし、その前の仕込みで何回かかかっているものがあつたので、現実には中間検証の中でこの原子力生活支援チームのことについてほとんど言及がないのと、日米協議についての言及はないのと、もう一つは、3月25、26日からですけれども、アメリカから放射線医療の専門家が来て、実はモニタリングとヨウ素剤の投入、幾つかの問題の論点について、医療の専門家とアメリカの専門家チームの会合を3日ぐらいやりました。ここで一定の方向性の提言とかが出ています。これは日米協議とは別枠でやったのですが、これも私が責任者をしました。このこともほとんど言及はありません。

もう一点言及がないのは、4月の頭に官邸の中に放射線医療の専門家の学者を集めて、10人ぐらいの専門家チームをほとんど常駐していただいて福島の情報を確認しながら、例えば子どもの例の20mSvやいろんな計画的避難区域をするときに、その10人に及ぶ放射線医療の専門家の人の意見を逐一聞きながらやっています。これは保安院や班目委員長、小佐古さんを始め、実はある一定の学者さんの言うことだけでは危ないという判断の中で幾つもラインをつくって、その中で意思決定をしていきました。そういうことに対しての言及は中間検証はほとんどないというのは、私なりに是非常に違和感を覚えました。

現実には理由としてはそういう理由で3月の下旬の真ん中ぐらい、23、24、25日ぐらいから避難の新たなオペレーションに対する準備が始まったということです。

○質問者 原子力の被災者支援チームなのですが、この計画的避難区域と緊急時避難準備区域への関わりというのは、ちょっと聞いた話ではコンセプトづくりではなくて、むしろそれが決まってからの地元調整を主にやっていたと聞いたのです。

○福山前副長官 全然ナンセンスです。ここにありますか。これは実は計画的避難区域、事務方が持ってきたものを時系列になりますけれども、どんどん手が入って修正されています。現実にはこのプロセスの中で、先ほども申し上げた放射線医療の専門家の先生方に何度もこれでどうでしょうという確認をしながら、一方で枝野さんに確認を取りながらやっています。もう間違いなくここには政治が関与しました。逆に言うと役人だけでまかしておけないというのが私たちの中では最初のプロセスの中で十分あつたので、そこはかなり綿密に政治がコミットしました。そのときに3月の終わりぐらいからようやくSPEEDIが出てきて、これも全く全体像が見えないような出し方をしてきたので、これは細野さんが相当3月の終わりにいかりまくって、全部出せということでいろんなシミュレーションをしました。

風向きも一様ではないということは途中からよくわかつたので、1年前の福島の気象条件と風向きを全部入れると、これから先の風向きを全部想定してSPEEDIを回せと言って全部回させたりとか、そういったことをやってこの計画的避難区域のプロセスは入って、その後です。おっしゃられたように私は飯舘の菅野さんや川俣の古川町長と官邸で事前に会ったり、細野さんと松下副大臣とマスコミに知られないように事前に福島に内々入って、

それぞれ5時間、3時間ぐらいずつ飯舘と川俣と南相馬の桜井さんと話をし、計画的避難区域の事前の説明をしに行ったり、その後、枝野さんに入ってもらったり、その後、正式な発表になってから、今度は私と平野さんと松下副大臣で飯舘、川俣の説明会に実際に私が足を運んで説明して、2時間ぐらいか3時間ぐらいずつ説明をさせていただいて、その後、何度も入ったりというのが地元調整で、それは勿論大変大きな重たいプロセスでしたけれども、実際の中身をつくる時もほとんど細野さんは私の副長官室に来て、当時は保安院やら原子力生活支援チームの主要メンバー、文科省含めて日々議論しながら彼らの持ってきたものをたたきながらやったというのが実態です。

○質問者 先ほどちょっとお話に出た放射線医療の専門家10人ほど4月上旬に集めている意見を聞きながらやっていったと。計画的避難区域というのは、20mSvを基準にしてそれを超えるところを避難区域と定めたのですけれども、その20の妥当性とかということも含めてこの専門家の人たちに。

○福山前副長官 勿論です。

○質問者 この医療専門家というのは官邸に。

○福山前副長官 官邸に置いたのですけれども、部屋がなかったので内閣府に一室設けてずっとしてもらいました。ほとんど3人ぐらいずつずっと交代制で常駐していただいでいて、非常にありがたかったです。それはメンバー表とか皆さん持っていますか。

○質問者 実はこの放射線医療専門家の話は今日初めてお聞きいたしました。

○福山前副長官 そうですか。放射線医療専門家チームはこれがメンバーです。これは実はこの人たちはそれぞれの専門家です。ずっと官邸からこの人たちにリスクコミュニケーションしてメッセージを発してもらったのと、これが専門家グループ、これが先生方です。私が一応トップをやりました。例えばで言うと、計画的避難区域のところでは4月1日か2日にスタートしています。この人たちに常にいろんなことを聞いて意思決手の材料にしました。

だから、このうちの先生何人かに聞いて、しゅっちゅうボールが来ているというか、いろんな諮問みたいなのがあって、そこに答えをしたということは言っていただけだと思います。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 これが日米の専門家でやったときのタスクフォースです。26日。これは日米でやりました。その日米の後に別のものを立ち上げたのがそれです。

○質問者 日本側のメンバーということですか。

○福山前副長官 それは日本側です。アメリカ側はアメリカ側の医療の専門家が来てやりました。

○質問者 これは後でコピーを取らせていただいたもよろしいですか。

○福山前副長官 いいですよ。

○質問者 ありがとうございます。

○質問者 このリスクコミュニケーションの図というのはよろしいですか。リスクコミュニケーションは別途またテーマにします。

○福山前副長官 それはどうぞ。

○質問者 大御所を集めた感じですね。

○福山前副長官 そうです。大御所というか、それなりに地域も含めていろんな立場の人を集めようと。なぜかという、

逆にいろんな人を集めて合議をしてもらおうと。その先生方がある程度一定のコンセンサスを取れたらやろうという話をしました。これが日米のタスクフォースの1回目の会合のあれです。

○質問者 確かにこの専門家グループは医学の方はかなり力点を置いていますね。

○福山前副長官 はい。もう完全にそういう思いでやっていました。

○質問者 ちょっとコピーを取らせてもらっていいですか。

○福山前副長官 はい。日米の専門家の調和させるための提案、これは日米の取組みを調和させ、専門意識で我々が協議した事項は数多くあり、以下がその提案であるというのは、これが日米の一定のリストです。ちゃんと実は報告書が上がっていますが、私の手元に今残っていないだけです。

○質問者 放射線医療専門家、これは。

○福山前副長官 それは日米です。

○質問者 医療専門家と同じですか。

○福山前副長官 そうです。これは3月25日ですが、先ほどの先生方に私なりに質問事項を上げたのがそれです。これを経験として実は先ほどの日米ではない方の医療専門家を立ち上げました。

○質問者 それで4月。

○福山前副長官 それが3月25日になっているはずです。メンバー表が日米両方ありました。日米がそれです。

○質問者 ちょっと外れるかもしれませんが、前川さんが入っているのは、前川さんは例の臨界事故のときの患者を最後まで診たからですね。

○福山前副長官 そうです。

○質問者 そういう見地というのは今回直接被曝していないので余り関係ないかもしれませんが、何か前川さんらしい発言はありましたか。

○福山前副長官 前川さんは東電の作業現場の作業環境がすごく悪くて、作業員の医療状況が悪いということで、それに対していち早く現地を見てもらってそれに対する提言とかこれをやれというのを政府に出してもらいました。それは本当に相当助かりました。

この先生方は本当に頭が下がるぐらい一生懸命やっただいて、これはまさに計画的避難ですけれども、住民の避難をする際の線量の判断基準についていろんな数字が出てきますと。お伺いしたいのは、実際に避難区域または線量はどの数字によることが適当でしょ

うか。20mSv という線量をどう考えればいいでしょうかと書いたら、長瀬先生、前川先生が連名でこういうふうに答えをしてくれて、こういうふうに連絡をいただいて佐々木先生の回答はこれで酒井先生の回答はこうでとって、こうやってみんな回答してくれて、このことも我々にとっては大きな材料にさせていただきました。

この先生方は私が副長官を辞めてからも本当に皆さんいろんなことで連絡をくれていて、一生懸命やっていただいたなという感じです。これが3月25日に最初をお願いしてチームを立ち上げて先生方から全部いろんな意見を聞くようになって、随分私たちの中では支えというか、

バックグラウンドに随分先生方のお陰で救われたという感じはします。

○質問者 今、最後に言っていたいただいた数人の先生方それぞれに説明が書いてある。大変貴重ですね。

○福山前副長官 はい。本当にありがたかった。

○質問者 こんなに丁寧なものは小佐古さん辺りからは出てこないだろうと思うし。

○福山前副長官 子どもの20mSv のときも、かなりきちんと先生方にお答えをいただいて、子どもの20mSv はこれです。子どもに対して問題になっていると。「20mSv を目安として原則全校再開という方向とする。ただし」ということに対してどうかというのをそれぞれの先生に聞いて、ずっと早急にこの方針で行われることについては現地の人心安定につながるとか先生からもあったり、全部こうやって先生方がみんな本当に1日とか半日でコメントいただいて、そのコメントを参考にしながら私たちも意思決定していったというのが実態です。

○質問者 これは個別にメールか何かで。

○福山前副長官 はい。ちゃんと事務局をつくってしまして、1日3人ぐらいは必ず常駐を内閣府にしてくれていたの、私たちは先生方に全部内閣府に行って、先生こんな状況ですけれども、どうしようみたいな話をすると、それをメールで全部事務方が送ってきて、先生方が全部それをまとめてくれて、こんな状況でこんな意見もあるよとって、本当に1日とか2日で返してくれるようなやり取りを何度もしました。

ただ、これも実はほとんどメディアは伝えてくれないのです。だから、実はこういう人が官邸の横にいて官邸でバックグラウンドしてくれているのだと伝えてくれれば随分人心のつながったと思うのですけれども、こういうことは一切報道してくれないのです。

○質問者 この専門家がいるというのはメディアには公表していたのですか。

○福山前副長官 していました。官邸のホームページにも全部載せていました。それでも全然逆の表の報道をしてくれないので。

○質問者 この子どものもちょっとコピーしていいですか。

○福山前副長官 でも、これで本当にまさにこのときこと人が言ったみたいな話だけは勘弁。

○質問者 わかりました。先生、そちらももしできればコピーさせていただければと思います。

[Redacted text block]

大分話が飛びました。

○質問者 それぞれのいろいろな専門家チーム、各論の話に先に入ってしまったのですが、
れども、実は我々は全体像、つまり立ち上がりとか、その立ち上がりのいきさつとか、
その後、どうやってメンバーを集めて何をやるというマニフェストをもらっていたのかとか、
そこら辺がまたわからないので、政府は政府でいろんなところで、
やっているのですけれども、そことどういう連携を取っていたのか、そこら
辺も我々の頭の中が整理されないので、まず先にちょうど今話が出ておりました原子力災
害専門家チームはどういうきっかけでいつごろ立ち上げてどういふふうメンバーを集め
て、総理はその辺りどういふふう認識されていて、政府全体の中ではどこに位置づけら
れていたのかという辺りをお聞かせいただけますか。

○福山前副長官 専門家チームは先ほどのあれのとおりですけれども、22、23日ぐらいに
現実問題として計画的避難区域というか、その計画的避難区域というのはまだ名称として
は出てきていませんが、これから避難のオペレーションをすることと、例のまさにおっ
しゃったように、飯舘、川俣が線量が高いですね。子どもたちが本当に大丈夫なのかとい
うことがあって、23日か24日かから例の簡易のスクリーニングをしていますね。1,080
人。あれは私は放医研に直接連絡をして、先生とやり合いをしてお願いしているのだ
すけれども、その動きがある中でこれは本当に炉の状況は先ほど申し上げたように水が
一定入るようになって安定をしつつある状況で今度は本格的に健康の被害を確認しなけれ
ばいけないという状況の中で申し訳ないのですけれども、安全委員会はだめだという状況
で、それはセカンドオピニオンだと言って、総理の言われている3～4人のメンバーと、
本当に医療の専門家を集めようと思って、私なりに官房長官と相談して、私が全部電話し
ました。最初に電話をして接触したのは、。お
二人はいろいろ調べてこの方がいいのではないかとすることを御推挙いただいた人がいて、
その人に連絡をとってお二人、まず官邸に来ていただきました。それが恐らく24、25日
だったと思います。

その先生方にあらゆる状況でバランスをとれて議論ができる人を紹介してくれと言って
リストが上がってきたのがそのリストです。更に言えば、我々も世の中とかテレビとかに
出ている専門家の中でそんなにある種信頼ができそうな先生を選んでお願いして、実は皆
さんに快諾をいただいたというのが実態です。

4月1日が専門家グループの初会合でしたが、ほぼ24、25日から動き出して1週間で
立ち上げたというのが実態です。事務局は内閣府から人が来てもらってずっと常駐してい

ただきました。本当によくやってくれました。内閣府で今もチームも中で事務局で佐藤さんがいますが、うちの事務所から幾らでもつなぎますが、彼が一生懸命先生方との中通しというか、橋渡し役をやってくれたと思っています。これは官房長官と総理にほとんど事後了解でこれで行きますと言って、ではお前が事務局長という形でやれと、ここからもうホームページつくって発信しますので、いろんなオピニオンを聞いて、それについては総理と官房長官と共有しますと言ったら、もうお前に任すという感じでスタートしたのが実態です。

○質問者 この集まっていたいただいた専門家の方々の行政組織の中での位置づけ、辞令か何か出ているのですか。

○福山前副長官 出ています。

○質問者 どういう辞令ですか。

○福山前副長官 それはちゃんと調べてお答えしますが、ちゃんと辞令が出て、日当ぐらい出しています。

○質問者 では、国家公務員として。

○福山前副長官 そうですね。国家公務員という立場だったか、特別国家公務員か非常勤か何かはわかりませんが、立場は渡しました。なぜかという、守秘義務があるからです。

○質問者 守秘義務がかかっている。

○福山前副長官 かかっています。

○質問者 辞令を見なければわからないかもしれませんが、指揮命令関係といえますか、趣旨からしますと多分諮問機関的な意味なのかなと、位置づけなのかと思うのですが、そこら辺はどこにぶら下がる形になるのですか。

○福山前副長官 官房長官にぶら下げたと思います。そこはちょっと確認します。[REDACTED]の番号と、[REDACTED]の番号を聞いてここから連絡し出したのが多分24日ぐらいです。

○質問者 現在も身分はずっと続いているのですか。

○福山前副長官 解散したかもしれませんが。そこは確認します。

○質問者 各専門家の先生方をお願いするときに具体的にどういうことをお願いしますという話はされたかと思うのですけれども、そのときの話、これというのをお願いしますというのはどんな。

○福山前副長官 もうとにかく基本的には専門的な知見を教えてくださいということです。

○質問者 放射線に関する。

○福山前副長官 そうです。完全にそういう感じです。

○質問者 この中間報告にも例えば先ほど校庭線量の話が出ていましたので、その例でお話しますと、校庭線量をどういうふうに決めていいのかといういきさつなどというのは非常に大事なところでありましたので、我々も中間報告に出すに当たってはいろんなところから話を聞いてああいう形でまとめてはいるのですけれども、役人だけを調べていたから

ということに原因があるのかもしれませんが、専門家チームという話が実は白紙であったというお恥ずかしい話で、そうすると、直接校庭線量を決める場において専門家と接するというにはならなかったということですね。

○福山前副長官 ないです。それは逆に接してしまうと全く別の立場のオピニオンが取れなくなるので、そこでいろんな議論が出ているのを私が事務局に投げて質問項目を先ほどみたいにつくって、上げてもらってフィードバックしてもらったという感じです。

○質問者 そうでしたら、専門家の意見は実質的には福山さんのところに集約させて、福山先生が専門家から集めた問題意識を持って、例えば文科省はこうやってと。

○福山前副長官 そうです。役所にぶつけました。

○質問者 そういう形になるということでしょうか。

○福山前副長官 はい。

○質問者 なるほど。わかりました。

○福山前副長官 だから、実は中間検証でちょっと気になったのは、原災本部が何かを言ってどうみたいな話がありますね。原災本部というのはあくまでも本部機能ですから、あれは意思決定機関ですから、簡単に言うと大臣が集まってこれで決めますよという話ですから、原災本部で決まった話というのはほとんどが生活支援チームで仕込んで、それを官房長官や総理が了解していただいて、各省調整も終わった話が原災本部に上がるので、原災本部から何かの提案がありましたみたいな話というのは実は主語がすごくあいまいなのです。

○質問者 今、原子力災害専門家チームと原子力災害支援チームはまた別ですね。

○福山前副長官 全然別です。

○質問者 原子力被災者支援チームなのですけども、これについては事務局の方から何か聞きますか。私の方から聞きますか。

3月29日に立ち上がった機関と聞いていて、これは海江田大臣も関与しているのですか。

○福山前副長官 勿論です。原子力生活支援チームも、これは本当になったかどうかわかりませんが、これは最初ぐらいに出てきている案文ですのでこれをやりましょう。これは分野の担当の決定の最初の事前のプレストペーパーです。これが基本方針案です。

○質問者 最終的には整理したときには原災本部にぶら下がるという整理がされていたけれども、5月の段階ですね。

○福山前副長官 はい。

○質問者 それまでの間というのは、位置づけとしては。

○福山前副長官 位置づけはこれです。緊急災害対策本部が11日にできます。11日に原子力災害対策本部ができます。その後、需給に関する検討会とかできます。この後、問題の計画停電になります。統合対策室ができます。これが15日で細野さんが入ります。震災ボランティアが16日、被災者生活支援チームが17日で、ここで実は原発以外の生活支援チームができます。その後、29日に原子力被災者生活支援チームができるのでここにぶ

ら下がります。よく本部がいったいだといって中間検証にも多少書かれているのですけれども、実は全部合理的な議論があります。この被災者生活支援は全部津波と地震の被害の福島以外の避難場所の確保とか物資の供給に全部ここはコミットしています。実はそのときに福島の議論などをしたら会議が全く関係ない別の次元の会議を同じメンバーを集めてやるなどというのは時間の無駄なので、こんなのは一緒にやる必要は全くないというので、最初これが立ち上がっています。

実は避難のプロセスも被災地の30km以内は[]行けません。全部逆に言うと防護服を着て、一般の民間人はなかなか入れさせられないので、自衛隊とか警察をお願いします。しかしながら、こちらの被災者生活支援チームは全く関係ありません。津波の場所から人がどんどん入って行ってやればいいので、そこは全然オペレーションが違います。ましてやこちらは気にしないで物資は行けるのですけれども、こちら側は物資は運ぼうと思ったらみんな逃げたのです。食料、ガソリン、だってそんなところに入るの嫌なわけですから、そのオペレーションを同じチームでやるなどというのは全く意味がない、時間の無駄なので、確実に分けました。

この生活支援チームは、先ほど言ったように炉が安定した時点で新たな避難先をつくったり、新たな生活支援をしたりするときにこちらが必要です。ここも経済被害は4月11日なのですけれども、一気に農業被害とか水の被害とかが出だしたのが4月の頭からです。これは農水省が一番最初に飛び込んできて、農業被害がある、米の問題がありますといって、ではこれと全然意味が違うので別のチームでつくりました。つまり、いっばいつくったというメディアの報道はあるのですけれども、役割とミッションが全然違うのです。逆にそれを一緒にやる方が意思決定としては合理的ではないし、時間もかかるしと。だから、現実にチームが全然ダブっていないはずなのです。生活支援は平野さんと仙谷さんに来てやっていただきました。ここは海江田大臣と細野さんと私がやって、[]、[]、原発事故も逆に言うとこれは枝野さんと野田さんといって、経済被害だから野田財務大臣に入ってもらいました。

これはそれぞれ指揮系統も違ってやらないともう時間ももったいないので、それぞれ役割を分けたというのが現実です。ここで先ほど言った避難、医療の問題、モニタリングの問題等についてはほとんど議論したというのが実態です。勿論、枝野さんは中心的に関わっていただいています。

○質問者 そうしますと、例えば先ほどの避難の話で、計画的避難準備区域とか、緊急時避難準備区域、緊急時避難のお話もありましたが、あの決定に関しては広瀬さんでしたか。

○福山前副長官 安全委員会の広瀬さん。

○質問者 安全委員会の方に急遽入られた広瀬さんが関与されていますけれども、広瀬さんはこの生活支援チームの中で実質的にいろいろと。

○福山前副長官 やってました。広瀬さんと、申し訳ないですけども、[]

途中から人選は枝野さんなのですけれども、とにかくあの安全委員会の事務局では話にならないといってほかにいないのかといったら広瀬さんの名前が挙がってきて広瀬さんが入ってこられて、実は随分前に動き出したのです。先ほどの保安院の安井さん、安全委員会の広瀬さん、文科省で言うと森口さん、この3人がコミットし出してから実は物事が全部動くようになりました。

○質問者 計画的避難区域とかは当時副長官室で検討していたときの資料というのは、事務方からももらっているのですけれども、あそこに出ていたメンバーが被災者生活支援チームに入っていたというようなイメージ。

○福山前副長官 大体ダブります。ただ、それは例えば水とか農業の話になれば農水省が出っ張ってきますね。廃棄物の話になれば、当時で言うと環境省が出っ張ってきますね。それぞれの軽重がそのときのテーマによって違うのですけれども、毎日やっているのです。毎日やっているのはどういうふうに行っているかという、ひどい話で私の部屋に来てみんなどわっと別に会議室でもない部屋に来てわっとやって、今こういう状況です、こういう状況ですとそれぞれが進捗状況を報告して、課題はこれですとこれを決めなければいけませんみたいな話になると、当時で言うと今の平野大臣が副大臣で、松下さんがいて、細野さんがいて、それでわっと決めるのですけれども、そこは政治家が勝手に決めるのではなくて、みんなで材料を出してどうするんだみたいな話の中でこういこうかと、だけれども、これでは資料が足りない、説得できないからもう一回持ってきてくれみたいな話を毎日やっていたということです。

現実の問題として申し上げれば、計画的避難に関して言えば、これは基本的には文科省と保安院と安全委員会が中心です。だから、細野さんも中心でやっていました。私も入っていました。これはそこで一生懸命下のたたき台をつくりました。だから、先ほど高嶋さんおっしゃられたように、計画的避難の準備は事務方で積み上がって、それをたたいてここにも先ほどありましたけれども、何種類も実は案のペーパーが積み上がっています。これは全部たたいてやりました。それを途中から枝野さんに確認をしながらという形でぐるぐる回していったというのが実態です。

最終決定か最終決定の手前ぐらいのところでは、必ず枝野さんに何回か入ってもらって、枝野さんの御意見も聞きながらという感じでした。文科の過程のときには、当然同様な話が出るのですけれども、ここには文科省が基本的には相当深くコミットしてくれていて、そこには鈴木副大臣がコミットしてくれているという状況でやりとりをしているというのが実態です。

○質問者 校庭の話も生活支援。

○質問者 被災者支援チームですか。

○福山前副長官 原子力災害被災者支援チームの中で、逆に言うと文科省がある程度仕切りながらやったということです。

○質問者 枠組みは原子力何でしたか。

○福山前副長官 生活支援チーム。

枠組みがどうなのかとか余りわからないのですけれどもね。その場に応じてあるテーマに応じて瞬間的に関連府省庁を含めたチームが瞬間的にできて意思決定して官房長官に上げるという状況でした。

○質問者 そういうふうに我々はイメージしていて、報告書もそういうふうにはでき上がっているのですけれども、その活動は一体何の活動なんだというと、アドホックに集まっているだけ。

○福山前副長官 アドホックだけではないです。ベースは生活支援が入りました。

○質問者 例えば避難の関係でも何度か原案をたたいてたたいてというときに、とりまとめ役をやっていたのはこのチームの事務局。

○福山前副長官 だから、広瀬さんですね。文科の場合は森口さんも関わっています。だって、文科省はモニタリングしなければいけないから。だから、計画避難をやるときに重要なのは、モニタリングなのです。安全委員会だけではないのです。安全委員会は最終的には建前で言うと諮問してOKを出すか出さないかの機関ですから、現実にはモニタリングが重要ですけども、計画避難区域の場合には文科省がモニタリングをして、それぞれがいろいろたたいて安全委員会も陪席をしながらわーわー言いながら物事を決めていったという感じです。ごめんなさい、話が拡散してしまいました。

○質問者 済みません、その原子力災害被災者支援チームには、事務局というのは特に固定された事務局というのは設置されたのでしょうか。

○福山前副長官 菅原さんを始めとした経産省内にチームができました。

○質問者 福山先生は。

○福山前副長官 私は多分チーム長代理か何かではないですか。

○質問者 事務局は菅原さん。

○福山前副長官 菅原さんという経産から来て内閣府に当時出向です。併任です。

○質問者 この支援チームの専属の事務局長ということ。

○福山前副長官 そうです。だから、ここが計画的避難区域のときにはいろんな首長の説得に当たったり、いろんな采配をしたり、リアクションを向こうに送る手配をしたりという形のことをずっと今もやっています。

○質問者 わかりました。

○質問者 先生、時間もあれなのでまた戻って、初動の関係等で残った質問を。

○福山前副長官 どうぞ。

○質問者 校庭とか大丈夫ですか。

○質問者 済みません、1点だけ。校庭の線量基準の関係なのですけれども、計画的避難区域は20mSvを超えるところは避難してくださいねということでお願いしていて、一方で福島校庭は20mSvのところまでは、先ほど先生がおっしゃっていたようにグラウンドの土を掘ったりとか除染等をしながら使ってもいいですよというようなメッセージを出し

ている。これがある種一見すると矛盾しているような感じなのではないかというような気が我々もするのです。

○福山前副長官 なぜ矛盾するのですか。

○質問者 その $3.8\mu\text{Sv}$ というのが基準値のように思っているように思いますが、その $3.8\mu\text{Sv/h}$ であれば、年間だと 20mSv になるという数字でありまして、そうすると、計画的避難区域 20 と同じではないかということが根底にあるのです。

○福山前副長官 だから避難させるべきではないという議論でしょうか。

○質問者 はい。

○福山前副長官 その議論はあり得るのですけれども、学校に 24 時間いるわけではありません。現実にあのときに皆さんごらんいただいたと思いますが、学校の中にいる、校舎の中にいると校舎はコンクリートなので、校舎の中が実は一番安全なのです。そのことは私たちは何度も確認しました。

校舎の中のモニタリングをすると、大体 10 分の 1 とかに落ちる数字が上がってきました。なおかつ、そうすると一番危ないのはどこかということ、通学路と家なのです。家はその当時はなかなか外へ出ないので大丈夫。そうすると、通学路が一番危ない。あとグラウンドだ。グラウンドを 1 時間にしたのは簡単で、通学するのに 5 分や 10 分ぐらいは外を歩くだろうと、グラウンドの上をと。だけれども、ほかは悪いけれども、体育の授業とかで外へ出るのは勘弁してほしいと。だから、2 時間とか 3 時間とか、当時言ってきたのですけれども、より保守的にやろうとって、これは鈴木副大臣と御相談して 1 時間にして、トータルでそれでやったらほとんどが 20 にいかないのです。一部 20 にいったところは土をかけたのです。

○質問者 それはどの時点で出た話ですか。

○福山前副長官 これは 4 月の終わりに言っていますから、5 月の前後ではないですか。連休明けにモニタリングするとかしないとか言っていました。その時点でそういう判断をしていると思います。

○質問者 [黒塗り] 福島県の教育委員会等が始業式を行うという決定を彼らは決めていて、[黒塗り]

[黒塗り] その 20 という数字、言わば緊急時と平時の間の数値を取られたということなのですが、その平時の一番高い数字を取られたということについて、県等の反発があったということも考慮の材料としてあったということですか。

○福山前副長官 平時の一番高い数字を。

○質問者 1 から 20 の間ですね。

○福山前副長官 20 を取ったことに対してですか。

○質問者 はい。

○福山前副長官 それはいいです。[黒塗り]

○質問者 それに対してはどういった。

○福山前副長官

それでなおかつ結果として言うと、先ほどまさにおっしゃったように、計画的避難区域は年間 20mSv だけれども、学校にいとそこは減災できる。結果として減災できないような相対的に高い地域は土をかいて除染をして、より子どもたちを安全しようという方策をとったのです。

社会的な影響は考慮するというのは ICRP にも勿論ありますし、20 が本当に緩すぎるかという、当時はまだ原発が安定化していませんから、緊急時だという判断もできるので、100 から 20 のうちの先ほど申し上げましたけれども、最低ラインと 0 から 20 の最高ラインの両方が今の爆発的なリスクと放射性物質が飛散している両方のリスクを兼ね備えている日本の避難の考え方としては有効ではないかという結論を結局持ったということです。

○質問者 理屈というよりはアナウンスの問題なのかもしれませんが、先ほど飯崎の方から質問した $3.8\mu\text{Sv}$ という数字を目安にしながら、 $3.8\mu\text{Sv}$ 以下の部分については無条件に使っていいよという仕切りになっていました。 $3.8\mu\text{Sv}$ を超えているところについては、以上だったかもしれませんが、それより上のところについては一定の条件付きで使ってもいいよということになって、 $3.8\mu\text{Sv}$ という数字は先ほどの議論に出たとは思いますが、屋内に 16 時間、外に 8 時間いたという前提で年間 20mSv になるという数字で、避難の区域を決めるときにもやはり同じ基準で屋内に 16 時間、屋外に 8 時間という基準で年間 20mSv に達する数字を算出していると。そうすると、実質的には先ほど福山先生がおっしゃるとおりに、子どもたちがずっと校庭にいるわけではないわけですから、8 時間も校庭にいるわけではないので、そんなに被曝をする心配もないのだということが実質的な話だとは思いますが、そのところを当初は余り強調しないで、外に 8 時間、屋内に 16 時間で年間 20mSv を下回りますから大丈夫ですよと言っても、結局 $3.8\mu\text{Sv}$ 以上のところで条件付きとはいえ学校を使ってもいいですよと、つまり、避難区域と同じくらいの線量のところで学校を使ってもいいですよということになってしまっていて、そのところについては当時、これを決めるときに議論があったかなかったかとい

うところについては。

○福山前副長官 ありました。10にしろという議論がありました。大人よりも子どもの方が小さい、逆に言うと空間線量で言うと土、地面に近いし、半分くらいにすべきではないかという議論はあったのですけれども、10にしたら一方で本当に大人はいいのかという議論が出ることに、10にしたらほかに絶対波及します。ほかの市町村がうちは10を超えているのにいいのかと絶対に言い出しますので、そうすると私たちが考えているのは勿論健康第一です。そこは最低限の健康で100mSv以上は有意性がないという話は何度も確認していますが、その中でやはり社会不安をあおらないということも並行して重要だったので、当時子どもを避難させろという声がすごい多かったのですけれども、子どもの中に私は親と一緒に福島にとどまるんだという子どもの声もあったし、父親や母親の事情で福島にいけない子どもたちを本当にそんなに怖い思いをさせるのかという声もあったし、ましてや福島県はどんどん人が出ていくのに対して、出ていくことに対してすごい抵抗が福島県庁の中にはあって、このことに対する配慮も必要でしたし、そこは判断がよかったかどうかはわかりませんが、少なくとも今おっしゃった3.8μSvより高いところに対して言えば、私たちはとにかく除染をしろという話をしながら意思決定をしたというのが実態です。

私が覚えているのはフランスですけれども、5月に総理と一緒にいったサミットの場合で実際に校庭と土をかいた状態での結果を持ったら、ほとんどの学校が20mSv以下で10以下だった、半分だったと。[REDACTED] 10になったではないかということで、ちょっとほっとしたのを覚えています。

○質問者 つまり、今の話でも出てきましたけれども、3.8を超えるところは避難区域と同じぐらいですので、実質的にそんなにないということですので。

○福山前副長官 24時間いたらね。

○質問者 形の上では、とりあえず3.8を超えるところについては校庭を使用禁止にした上で、まず校庭の除染作業を先行させて、3.8を落ちたところでOKにすると。そうすれば、避難区域を非常にパラレルに理解されることになるかと思うのですけれども、そういう議論はなかったのでしょうか。

○福山前副長官 それは校庭1時間をOKしたことに對してですか。

○質問者 はい。

○福山前副長官 校庭1時間をOKにしたのは、通学のときに絶対必要だと言われたのです。校庭を通過して校舎の中に入る学校だと。ゼロにしたら、絶対神経質に校庭の上を1分か2分か3分かかわからないのですけれども、学校の校舎の中に入るときに子どもがそれだけで校庭の上を歩いただけで精神的にすごい負担がかかるから、1時間だけOKしてくれれば学校の通学の中で校庭を5分や10分通学の上で歩いても大丈夫だよと言えるので、0にしたら絶対に余計に子どもが、うわっ、土の上を歩いた、お前は今日は放射線を浴びているぞみたいないじめが絶対起こるといふ議論をして1時間だけOKにしたのです。

○質問者 校庭で体育を1時間やってもいいという趣旨ではないのですか。

○福山前副長官 違いますよ。それに子どもだから、校庭で走り回るということもあり得るだろうし、もっと言えば町の公園とかは線量が高かったのです。子どもさん、赤ちゃんとか連れているお母さんとかは、実は公園は結構線量が高くて、そこに何分かでもいただけでわっとなると、それは本当に不安に陥れるから、とにかく1時間、先ほど言っていた話、コンクリートの校舎の中に入れて家にいるよりずっと安全なわけですから、そういう状況の中で1時間だけはバッファーとしてOKした方がいいのではないかという議論をしたのです。

○質問者 よくわかりました。

○質問者 もう一つ質問。我々が文科省のところから入手している資料からつくった資料なのですけれども、これは福島市内の中で、各学校の校庭の線量、4月上旬に集中3日間ぐらいかけてやりました。そのときの線量で3.8 μ Sv超えるところは赤、それより小さいところは緑にしましたが、こうなっていました。福島全体で言うところの形。1Fはこの辺りですかね。ここが多いのは当然としまして、福島の郡山に幾つか出てきて。

○福山前副長官 二本松とか郡山は高いのです。

○質問者 二本松もそうですね。それで、これを見たときに福島と二本松と郡山を避難区域にはしていないわけですが、避難区域にしなくていいのかという議論がこれを見ると出てきてしまうのですけれども、そういう議論というのはなかったですか。

○福山前副長官 ありましたけれども、現実問題として言うと、福島と郡山が避難するなどという、社会的な影響が大きすぎるのと、1つ根本的に違うのは、面で高いのではないのです。点で高いのです。だから、福島市は全体の面積で考えたときに一部が高いのです。郡山も点で高いのです。それは恐らく風とか地形の関係だと思えます。これは飯館とか川俣みたいなのか、浪江みたいに面で高い話とは全然違う

○質問者 わかりました。計画的避難区域を決めるときにどのくらいの地点のモニタリングをやった結果を使っているかというのはごらんになったことはありますか。

○福山前副長官 勿論、全部見えています。

○質問者 福島の市内のところはほとんど実は周辺では3ポイントだけしかやっていない。

○福山前副長官 それはわからないですけれどもね。

○質問者 むしろ校庭線量の方がよほど高い。

○福山前副長官 校庭線量の方が高いのです。

○質問者 いっぱい調べてはいるのですけれども。

○福山前副長官 なぜ校庭線量が高いかも全部確認しました。

○質問者 逆に、校庭以外の道路はどうかとか、草地はどうかとか、そのところを調べた方がいいのではないかという話にはならなかったですか。

○福山前副長官 草地はもともと高いのは意識していたので、だから、先ほどの公園の話はまさに草の問題です。道路の話もありましたが、当時は福島は全然落ち着いていなかったもので、もうとにかく福島県は大変だったですから。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 ただ、ポイントが何ポイントしか見つけていないというお話はあるのですが、現実にはアメリカ等から線量マップが来ていますから、全体は相対的に高いのはわかっているのです。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、ありがとうございます。後でこの部分をちょっと済みません。

○質問者 済みません、あと1点だけいいですか。先ほど3.8を超えた場合の1時間に制限するといった内容の指示になっているということだったのですが、逆に3.8を下回った場合、何も条件なく、通知も使用できることを伝えていましたが、ただ、放射線防護の原則から言うと、放射線というのはできるだけ浴びない方がいいということで、3.8未満のところでも何か制限を加えた方がいいのではないかという議論はありませんでしたか。

○福山前副長官 あったと思います。

○質問者 具体的に何か記憶されていますか。

○福山前副長官 あったと思いますが、これは多分夏までにとにかく除染とかをして対応しましょうという議論があったような気がするのです。要は1年間、年間です。現実の問題として言うと、当時の原発の安定性から言ってまだわからないと。とにかく早く学校を再開するなら再開する、動かすなら動かすということと、安心をしてもらうことと、夏休みまでに何とか対応をしっかりとしようという議論の中でこういう判断をしたと思います。

もし3.8 μ Sv未満のところは、でも何か制限をするという話になると先ほど申し上げたように、では18も危ないんだ、17も危ないんだ、10でも危ないんだという議論に広がっていきますので、そうするとイコール先ほど申し上げた計画的避難区域を川俣、飯館にしましたけれども、それ以外も広がるということが状況的に言えば少しリスクとしてはあるかな。ましてや年間の被曝線量ですから、その状況の中でよく議論したのは、雨が降り、水で流して現実問題として線量がどの程度のレベルで比率で減災するかも確認したいという話がある中で決めたと、今、質問を受けたので思い出すとそんな感じの議論をしました。

○質問者 わかりました。

○質問者 済みません、時間もかなり迫っておりますので簡単に残りの質問の部分を聞かせていただければと思います。

質問事項の1.の(2)と(3)なのですが、小佐古参与の活動について、小佐古参与はいろいろ提言とかを出されていて、サイトの外のことについては福山副長官にお願いして各省に落としていただいたということをおっしゃっていたのですが、そういうふうな役回りというか関係になることになったきっかけ。

○福山前副長官 3月16日の小佐古さんは任命されていると思いますが、私は余り知りませんでした。これは細野さんが空本さんから推挙を受けて、自分のサポーターというか、助言者としてということをやさんに言って、菅さんも面識なかったけれども、いいだろうということでサインされました。

ポイントは、14日に例の作業員の基準を250に引き上げているはずですが、17日に職員の暫定規制値を上げていますが、私のところには3月18日だと思いますが、小佐古参与が初めて空本さんと来られました。このときに相当怒られました。まずは作業の基準を100から250などというのは小さすぎると、作業員がなくなるぞと、いなくなるぞと、500に上げると、これがICRPの規制値だと。もう一つは、職員も今のままの暫定規制値は甘すぎると、緩すぎると、もっと高くないと、忘れもしませんが、日本のマーケットから食べ物が消えるぞとおっしゃいました。

一方で、彼は炉の状況や避難の状況については非常に詳しくだったので、私にはSPEEDIを動かしてちゃんとやらなければおかしいではないかという話をさんざんされました。そのSPEEDIも、SPEEDIとWSPEEDIの両方の話をいろいろされて、これでやらなければおかしいではないかということをやさん言われて、それで、はい、わかりましたと、先ほどの話ですけれども、当時、私はみんな専門家ですから、どの人の話を聞いてもえらいなと思うタイプなので、すごいなと思って、もういつでも言ってきてくださいとって提言書を受け取ったか聞いたかだと思います。

それからもしょっちゅう私のところに来られて、次は多分20日ぐらいに来られていると思いますが、そのたびにいろんなことを言われました。私は自分で処理できる範囲と処理できない範囲が、別に私は小佐古さんの面倒を見るための役割ではないので、申し訳ないけれども、秘書官の鈴木さんに小佐古さんの言われているものは多岐にわたって重要なポイントなのでそれを全部安全委員会に降ろして、そこから各省庁で判断できるものは判断してくれと言って指示を出して、私は会えるときは会って話を聞いて、できることはやりました。

それで鈴木さんから各省庁に投げていろんな話をしました。極めつけは例の23日のSPEEDIが出たときの話ですが、先ほど申し上げたように、総理の前で小佐古さんと班目さんが言い合いをして久住先生がしゅんとなり出して、総理がもう勝手にやってくれというような空気だったので、私が引き取ってそれから2回内閣府の会議室で会議をしました。そのときにいろんな避難の話とかもしてまとめていったのですが、結果としては屋内退避等についてもその場では一応理解は示していただいたと思っています。

SPEEDIの話で申し上げると、SPEEDIのことについては一切16、17日まで知らないと思います。メディアを通じてSPEEDIというのがあると聞きましたけれども、何のことやらさっぱりわからないというのが実態のところでした。

これは私の記憶は定かではないのですが、小佐古先生が登場してからか、小佐古先生が登場する前かわからないのですけれども、どちらにしても3月20日の以前、3月16日以

降です。16～20日の間に私は班目委員長を自分の副長官室に呼んで、副長官と私と秘書官と班目委員長と3人でSPEEDIというのがあるらしいけれども、なぜあんなに言われているのと、回しているのだったらちゃんとやって持ってきてよと言ったら、班目さんは私に明確にSPEEDIは動かしていませんという話をして、自分は所在についても知らない、SPEEDIについてはわからないという話をされました。それで小佐古さんがいろいろ言いだして、SPEEDIで最も世の中が騒ぎ出すのが17、18日だと思います。そのときに私は官房長官とそれこそSPEEDIの担当である文科省や安全委員会、保安院を呼んでどうなっているんだというのを官房長官とやりました。これは2回やっています。

私の部屋でやったこともあるし、官房長官の部屋でやったこともあるのですけれども、そのときに逆に官房長官からも言いましたけれども、私が個人のときも言いました。モニタリングの数字があるでしょうと、モニタリングの数字があるのだから、そこから逆算して放出源情報を取り出して、SPEEDIは動かさないのと。彼らはすぐに放出源情報がないから動かしていませんというから、逆算したらできないのかみたいな問題提起は明確に枝野さんと私がしました。

結果として出てきたのがダストサンプリングの22日、4か所で取れたと行って23日に出てきます。ここから先は後付けの議論ですが、なぜ17日、18日にやれと言ったのに出てこなかったのかと言ったら、文科省や安全委員会がいったのは、18～21日ぐらいまでは風向きが海側に吹いていたので、うまく有効なダストサンプリングが取れなかったのでSPEEDIは出せませんでしたと答えています。そのことについては真偽のほどは私はわかりません。ただ、SPEEDIに関しては現実にそういう状況です。

あえて問題提起をさせていただくと、中間検証にも出ていましたが、では、SPEEDIの存在を知っていて、現実にSPEEDIがあったということがわかった状況で11日、12日だったらどうだったかという線で言うと、私は同心円状での避難は不可避だったと思います。なぜなら、先ほどから同じことを申し上げているのですが、爆発のリスクとメルトダウンのリスクを常に抱えていて、一方でベントをして、水素爆発で放射性物質が外へ出ているようなリスクを抱えている状況の中で、例えばSPEEDIを回して南相馬のこちらからこちらへ逃げてくださとか、田村郡は大丈夫ですから葛尾と浪江だけ出てくださいと行って、そんな状況のオペレーションが当時の11日、12日のまさに冒頭の原点に戻るのですけれども、電話がつかなくなっていて通信が途絶えていて停電の状況でできたかという、私はSPEEDIの存在を知っていたとしても、同心円状での避難は不可避だと思っています。

もっと言えば、悪いのですけれども、コンピュータのソフトに数字を仮に入れ込んだもので一人ひとりの生活基盤や家や田畑や財産をほったらかして避難をしろという指示を、ソフトの数字で更には言えばあなたはここは大丈夫ですけれども、あなたからこちらの境は逃げてくださなどという説明があつた11日、12日、13日にできたとは私は到底思えません。

これは明確に私はSPEEDIの存在を知らなかったことやその伝達がなかったことに関しては本当に遺憾に思いますしけしからぬといまだに思っていますけれども、しかし、あつ

たから個別にちゃんと避難指示ができたかという、それは政治的にはできなかったといまだに思っています。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 だから、そこはこれから要検証だと思いますし、よく言われている SPEEDI の3月の終わりの30日か何かのところで福山は出さなくてもいいという判断をした SPEEDI の紙があります。あれもあのときは計画的避難区域の議論を散々していました。毎日やっていました。あのときに文科省が SPEEDI のものを持ってこないの、細野さんが激怒したのです。それでようやく計画的避難区域にできる材料の SPEEDI をいろいろ議論してこういう方向でやろうと一旦方向性が固まった、何回もやり直して1日3回くらいアドホックな会議をしていたときの最終局面に、恐らく森口さんだと思いますが、ペーパーを出してきました。そのときのペーパーを私は残っているのですけれども、私がこれは今出さないでいいよと言ったのは簡単です。あの3番目のもののプレゼンの仕方はどういうプレゼンかという、実は回していましたと。しかし、それは担当者が思いつきでとにかくアットランダムに入れた50ぐらいのものが残っていますと。それは例えば全部の炉心が溶けた場合はこうだとか、10%炉心が溶けた場合はどうだとかそんなことが思いつきのように入っていますと。

だから、そのことについて彼らの持ってきたペーパーは皆さんお持ちのペーパーと、私のところにも案と書いてあるのがあるのでどれが本当かわからないのですけれども、3を公開することになるとそのシミュレーションの実施を今後躊躇することになる。きっと同じですね。つまり、何でもかんでも放射線情報がわからないので担当者が適当に打ち込んだ数字なのですと、これを出すことになった場合に、仮に数字をやるときにこれから先そんなことができなくなるので、ましてや今の計画的避難区域の設定等については全く参考になりません。それはそうなのです。だって、現実的にモニタリングを前提としたものが今出てきて、そのことを延々と3日間ぐらい集中してやっているときに、このことは今出しませんよと言われて、そんな適当に入れたものだったら意味がないなと私は言ったのを覚えています。

ただし、未来永劫出すななどと言った意味もないし、これは私は弁解するわけでもありません。もっと言えば、そんな SPEEDI のシミュレーションはその時点ですることについて意味がないと思っていましたので、私たちにとっては本当の実数値は何かということ逆算してやれと言ってきたので、結果としては計画的避難区域の仕組みが一定でき上がったときの最後の最後、みんなが立ち上がってこれから官房長官のところに行こうやと言ったときに、情報公開請求がみたいな話だったので、いいのではないのかと言ったのが実態です。全然隠し隔てはありません。

○質問者 ③についてはそういうことですね。

○福山前副長官 私は全く意味がないと思いますよ。

○質問者 思考過程にすぎないのでおっしゃるとおりだと思います。

○質問者 わかりました。

○福山前副長官 SPEEDI は現実そうです。でも、23日以降の SPEEDI は活用しませんでした。実は御案内のように23日とか22日に2号機のベントの議論が出ていませんか。

○質問者 24日に。

○質問者 圧力が上がったものですね。

○福山前副長官 そのときには私は執務室ではっきり覚えているのですけれども、はっきり言ったのです。そのときは SPEEDI を回してくれと。ベントする直前に SPEEDI を回して風向きを判断して避難の指示を出すから、ベントの前に必ず SPEEDI を回して避難の指示を出すので、そのベントのときにはちゃんと直前に確認してねという話を総理の執務室でした覚えがありますから、実は22、23日の最初に SPEEDI の結果が出たときから、SPEEDI というのは私の頭の中には完全にインプットされていました。

○質問者 わかりました。

○質問者 あのとときには SPEEDI が終わっているのですね。

○福山前副長官 終わっています。

○質問者 わかりました。済みません、私から最後になのですけれども、24日の件ともちょっと関わるのですけれども、1.の(3)で安全委員会の事務局能力の強化ということで、最終的に広瀬参与が任命されるのですけれども、24日に岩橋局長が総理のところと呼ばれて、サイトの外のことを安全委員会はもっと積極的に責任を持ってやってほしいというようなことを言われ、その後、岩橋局長と枝野官房長官、福山副長官が話をされて何とかするから事務局は頑張してほしいという話をして。

○福山前副長官 しました。

○質問者 最終的にどんどん強化をされていったという流れがあるという、事実関係としてはそれは。

○福山前副長官 そうです。私は広瀬さんについての人事については、個別の名前で言っていないです。

[REDACTED]

しかし、IAEA の報告書を8月につくりますが、そのときに広瀬さんがほとんど書くの

ですけれども、

ただ、広瀬さんは結果としては大変頑張っていたと、これが大体の経緯です。小佐古さんに関して申し上げますと、済みません、私は余人の悪口を言いたくないのですけれども、職員の暫定基準にしても、作業員の線量についても、片方で緩めろという議論をされます。片方でいろんなことを言われます。途中で食品安全委員会がこの放射線に対して特別の参与チームか何か、諮問チームか何かをつくりませんか。3月の中旬につくるでしょう。

○質問者 ありますね。

○福山前副長官 そのときに私は食品安全委員会の何とかチームに、小佐古さんに入ってもらうように画策をしました。小佐古さんの能力が高いと思っていたので、小佐古さんに現実に食品安全委員会に入ってもらえれば、それである程度のことが本人がいちいち私に言わなくてもそこである程度議論ができればいいではないかと思って入ってくださいとお願いしたら、それは本当に固辞されました。私の中ではちょっと不思議な気持ちがありました。なぜあれだけ言っているのに、ちゃんと公式の場所で発言の場所を与えているのに断られるのだろうかというのが正直言って思いました。

それで例の4月の辞める話になるのですけれども、これは突然でびっくりして、なおかつ、子どもの話で泣かれたときにはびっくりまして、彼は子どもについては10mSvにしるということは私たちに何度も言っていましたけれども、1mSvにしるということは実は一切言われたことがそれまでありませんでしたので、私なりには相当実は驚いたというのが正直なところですよ。

[Redacted text block]

[REDACTED]

○質問者 小佐古さんでもそうですけれども、そういうのが何人かおられるのですけれども、その中で原子力安全委員長の班目さんが、時と場合によって言うことが違ってしまったりとか、それでなおかつ人事的に見たときに、そこにずっといまだにおられるというのがなぜなのですか。

○福山前副長官 これは国会同意人事だというのが最大のネックですね。だから、辞めさせたいという声は何回もありましたが、1つは途中で辞めさせて次に来る人は、本当に人選が大変だということと、それを与野党のねじれている中で選べるかどうかということと、どういう立場をこの原子力村だと言われている状態でだれを選ぶのだということは相当政治的になりますのでそこは遠慮したということと、本当に原子力安全委員会の委員長を途中でお役御免にしているのかというのがみんなありました。ただ、一番大きいのは、国会同意人事ですから、辞めさせた後の再任用をだれにしていくかどうか、国会同意人事はそれでうまくいくのかとか。もっと言うと、柳田先生は御理解いただけると思いますがけれども、

班目安全委員長の首を切ってトカゲのしっぽ切りかと絶対言われますので、そのことが本当に全体を考えたときにいいのかという判断を、これも菅さんとはよくしゃべりました。

最後に生意気を申し上げて恐縮なのですが、中間検証を見て気づいたのは、それぞれの章立てで原災本部という主語であったり、官邸であったり、例えば吉田さんが報告するときに官庁等へ報告したというのがいっぱいあるのです。これは実は全然わからないのです。官庁等への報告は一体だれだと。だれというのは個別の名前を言っているのではないのです。この官庁等への報告が危機管理センターなのか、ERSSなのかによって全然違いますし、実はこのことが個別にどう我々のところに届いているかということについて言うと、ほとんど多分届いていません。

官邸5階という話と関係機関という表記と政府という表記があります。これは全部違います。一番危ないのは、私はすごく思っているのですが、官邸という表現がすごく危ないと思っています。官邸というのは当時で言うと、先から一度も言及していませんが、1つは連絡室が途中から2階にありました。ここに実はアメリカの専門家も途中から入ってもらうことになります。危機管理センターの地下があります、中2階があります、■■があります、総理の執務室があります。更に言えば官房長官が毎日毎日のあれだけの会見をやっているときに報告が上がってくる官房長官会見の打ち合わせがあります。私の副長官室は中盤以降は重要になりますが、実は最初のうちは私はほとんど自分の部屋に戻らないで長官、上下をうろうろしていたので当初は関係ないのですが、実はこれのどこに上がってきたかというのはすごく重要で、なおかつ計画停電のときに申し上げたように、実は経産省だけが持っていた情報はいっぱいあるはずなのです。保安院、経産省、資源エネルギー庁だけが持っていて、経産省の中でぐるぐる回っていてこちらには上げなかった情報がいっぱいあるはずで、それが実は中間報告の中で言うと全然どれがどれなのか私の中でわからない。ここは将来的な意思決定をどうするかというところにも情報伝達で言うとすごく重要な要素だと思っていて、本当に生意気なのですが、若干済みません気になったので余計なことを申し上げました。

○質問者 それは実は我々よくわかっていまして、本当は中間報告の中でも当初のドラフトでは固有名詞をいっぱい書いていたのです。ただ、全部の方のヒアリングがまだ終わっていないような段階で固有名詞とかを、官邸というのは確かにおっしゃるとおり、官邸と言っても総理まで届いているものと届いていないものと、官房長官には届いているものと届いていないものと、単に官邸にそこにいた役人だけの耳に入っているだけのものもあって、そういうものも全然区別がついていないのではないかと言えばそのとおりなのです。

だから、これはおっしゃるとおりの指摘のとおりだと思って、我々は最終報告にはきちんと。

○福山前副長官 是非よろしく申し上げます。

○質問者 問題がある部署については細かく、ここに問題があるということがわかるような形でやりたいと思っております。そういう必要がないところについてはごまかしてしま

うところもあるかもしれませんが、問題があるところについてはそういう意識を持ってやるつもりです。

○福山前副長官 是非よろしく願いいたします。

○質問者 かなり実は削ったというところがございます、最終報告は。

○福山前副長官 済みません、本当に生意気を申し上げました。柳田先生、長時間にわたりありがとうございました。

○質問者 リアルな話でありがとうございました。